

風流仏

幸田露伴

青空文庫

発端 ほつたん

如是我聞 によぜがもん

上 いっこう
一 向專念の修業幾年 いくねん

三尊 さんぞん 四天王十二童子十六羅漢 らかん さては五百羅漢、までを胸中に
 蔵 おさ めて鉞 なた 小刀 こがたな に彫り浮かべる腕前に、運慶 うんけい も知らぬ人 ひと は讚 さんだ
 歎 ん すれども鳥 とり 仏師 ぶつし 知る身の心耻 はぢ かしく、其 その 道 みち に志 こころ す事 こと 深 ふか き
 につけておのが業 わざ の足らざるを恨 にく み、爰 こゝ 日本美術国に生れながら
 今の世に飛驒 ひだ の工匠 たくみ なしと云 い わせん事 こと 残念 ざんねん なり、珠 しゆ 運命 うんめい の有 あ ら

ん限りは及ばぬ力の及ぶ丈たケを尽してせめては我が好すきの心に満足
 さすべく、且かつは石膏細工の鼻高とうじんき唐人とうじんめに下目しためで見られし鬱う
つぶん憤つぶんの幾分を晴はらすべしと、可愛かわいや一向専念の誓ちかを嗟さが峨がの釈迦しやくかに
たて立たてし男おとこ、齡としは何歳いくつぞ二十一の春これ是より風は嵐らんざん山の霞かすみをなぐつて
はらわた腸断はらわたつ俳諧師はいかいしが、蝶ちようになれくと祈る落花のおもしろきをも眺なが
 むる事なくて、見ぬ天竺てんじくの何の花、彫りかけて永き日の入いり相あい
 の鐘かねにかなしむ程凝こり固かたまつては、白ゆうだち雨う三条四条の塵埃ほこりを洗せんつて
おもて小石せきの面おもてはまだ乾かぬに、空そらさりげなく澄める月の影宿しみずす清水しみずに、
うり瓜浸うりして食くいつ、齒牙香しがこうと詩人しじんの洒落しゃれる川原かわらの夕涼ゆふりやうみ快くわいきをも余よ
そ所そになし、徒いたずらに垣かきをからみし夕顔ゆげんの暮れ残るを見ながら白びやくだ
らん檀らんの切り屑蚊遣くずかやりに焼たきて是も余徳とあり難がたかるこそおかしけ

れ。顔の色を林間の紅葉もみじに争まいて酒に暖めらるゝ風流の仲間にも
 入いらず、硝子ガラス越しの雪見こんぶに昆布ふとんを蒲団ふとんにしての湯豆腐すいを粹すいがる徒
 党ひにも加まわらねば、まして島原しまばら祇園ぎおんの艶えん色しよくには横眼よこめ遣つかい一
 トつせず、おのが手作りの弁天べんてん様に涎流よだれして余念よねんなく惚ほれ込み、
 琴三味線ことしやみせんのあじこうたな小歌きぎは聞きもせねど、夢うちの中には緊那羅きんならじん神かみの声
 を耳みみにするまでの熱心ねつしん、あわれ毘首びしゆ竭摩かつまの魂こん魄ぱくも乗り移うつらでや
 あるべき。かくて三年みつとせばかり浮世うきよを慕まつ直すぐに渡わたり行ゆかれれば、勤
 むるに追付おしづく悪魔あくまは無なき道理道理、殊ことさら幼少せうしやうより備そなつての稟うまれつき賦賦、
 雪ゆきをまろめて達摩だるまを作り大根だいこんを斬きりて鸞うそどりの形かたちを写うつしゝにさえ、屢しばしば
 人を驚おどかせしに、修業しゆぎやうの功こうを積つみし上うへ、憤ふん発ぱつの勇ゆうを加くえしなれば
 冴さええ腕うでは愈いよいよ々よき冴さええ鋭とういき刀やいばは愈いよいよ鋭よくく、七歳しちさいの初しよ発ほつ心しん二十四にじゅうの曉あけ

に成道じょうどうして師匠しせうも是これまでなりと許すに珠運たままは忽たちまち思い立ちひ独ひとり身者とりものの気楽たぐみさ親譲りの家財けざいを売つてのけ、いざや奈良鎌倉日光に昔の工匠たくみが跡訪あとわんと少し許ばかりの道具を肩にし、草鞋わらじの紐ひもの結むすいなれで度々解くるを笑われながら、物のあわれも是よりぞ知る旅。

下 苦勞は知らず勉強の徳

汽車もある世に、さりとは修業する身の痛ましや、菅笠すががさは街道ほこりの埃ほこりに赤あかうなつて肌着はだぎに風呂場ふろばの虱しらみを避け得ず、春の日永ひながきになわてな暇なに疲あれては蝶ちよううらくと飛ぶに翼うらや羨うらやましく、秋の夜は淋さびしき床とこに寢覚ねざめて、隣りの齒はぎしみに魂たまを驚おどかす。旅路りょろのなさけなき事、

風吹き荒み熱砂顔にぶつかる時眼を閉ぎてあゆめば、邪見の喇
 叭気を注げるがらくの馬車に胆ちぢみあがり、雨降り切りては
 新道のさくれ石足を嚙むに生爪を剥し悩むを胴慾の車夫法
 外の価を貪り、尚も並木で五割酒銭は天下の法だとゆるす、仇も
 なさけも一日限りの、人情は薄き掛け蒲団に襟首さむく、待
 遇は冷な平の内に蒟蒻黒し。珠運素より貧きには馴れて
 も、加茂川の水柔らかなる所に生長て初て野越え山越えのつら
 きを覚えし草枕、露に湿りて心細き夢おぼつかなかも馴れし
 都の空を遶るに無残や郭公待もせぬ耳に眠りを切つて破れ戸
 の罅隙に、我は顔の明星光りきらめくうら悲しさ、或は柳散り桐
 落ちて無常身に染る野寺の鐘、つく／＼命は森林を縫う稻妻のい

と続き難き者と観ずるに付ても志願を遂ぐる道遠しと意馬に鞭打
 ち励ましつ、漸く東海道の名刹古社に神像木仏梁欄間の彫りま
 で見巡りて鎌倉東京日光も見たり、是より最後の樂は奈良じやと
 急ぎ登り行く碓氷峠の冬最中、雪たけありて裾寒き浅間下ろし
 の烈しきにめげず臆せず、名に高き和田塩尻を藁沓の底に踏
 み蹂り、木曾路に入りて日照山棧橋寢覚後になし須原の宿に
 着にけり。

第一
如によぜ是そう相

書けぬ所が美しさの第一だいいちぎたい義諦

名物うまに甘き物ありて、空すきはら腹すはらに須原すはらのとろゝ汁ほか殊すの外ほか妙まうなるに
飯めし幾杯いくはいか滑り込ませたる身からだ体を此このまま尽つ寝ねさするも毒どくとは思えどす為
る事なく、道中日みちひ記つ注しけ終しまいて、のつそつしながら煤すすびたる行あんど
燈あんの横手の楽らく落がきを讀よめば山梨やまもと県かん士族すけ山おお本え勘やま介やま大江山退治

の際一泊と禿筆の跡、さては英雄殿もひとり旅の退屈に閉口し
 ての御わざくれ、おかしき計りかあわれに覚えて初対面から膝を
 ぐずして語る炬燵に相宿の友もなき珠運、微なる埋火に脚を
 烘り、つくねんとして櫓の上に首投げかけ、うつら／＼となる所へ
 此方をさして来る足音、しとやかなるは踵に亀裂きらせしき程
 の下女にあらず。御免なされと襖越しのやさしき声に胸ときめき、
 為かけた欠伸を半分噛みて何とも知れぬ返辞をすれば、唐紙す
 る／＼と開き丁寧に辞義して、冬の日の木曾路嘸や御疲に御
 座りましようが御覧下され是は当所の名誉花漬今年はなづけの夏のあつ
 さをも越して今降る雪の真最中、色もあせずおに居りまする梅
 桃桜のあだくらべ、御意に入りましたら蔭膳かげぜんを信濃しなのへ向けて人

知らぬ寒さを知られし都の御方おかたへ御土産おみやげにと心憎あいきようき 愛あいきよう 嬌よう 言葉
しょうばい 商 買つや の艶つやとてなまめかしく売物かに香かを添かゆる口のきゝぶりに
 利発きたあらわれ、世馴よなれて洩つひらず、さりとして 軽かるはずみ 佻いたにもなきとり
 なし、持きたち来つひりし包静かにひらきて二箱三箱差いだし出す手てつきしおら
 しさに、花よそは余所よそになりてうつゝなく覗のぞき込こむ此方こなたの眼めを避さけて
そむ 背向そむくる顔、折すきまもから透間すきまも洩かぜる風かぜに燈ともしび 火動こき明こらかにこれは見えざる
 にさえ隠れ難がき美おしさ。我折がれ深山みやまに是これは何物。

第二 如_{によ}是_ぜ体_{たい}

粹_{すい}の羯羅藍_{かららん}と実_{じつ}の阿羅藍_{あららん}

見て面白_{おもしろ}き世_よの中_{なか}に聞_きて悲_{かな}しき人_{ひと}の上_{うへ}あり。昔_{むかし}は此_{こゝ}京_{きやう}にして此_{こゝ}妓_こありと評_{ひやう}判_{はん}は八坂_{やさか}の塔_{たか}より高_{たか}く其_{その}名_なは音_{おと}羽_わの滝_{たき}より響_{ひび}きし室_{むろ}香_かと云_いえる芸_{げい}子_こありしが、さる程_{ほど}に地_じ主_{しゆ}権_{こん}現_{げん}の花_{はな}の色_{いろ}盛_{しょう}者_{じゃ}必_{かならず}衰_{おとろ}の理_{ことわり}をのがれず、梅_{うめ}岡_{おか}何_{なに}某_{がし}と呼_よばれし中国_{ちゆうごく}浪_{らう}人_{にん}のきりゝと

して男らしきに契ちぎりを込め、浅からぬ中となりしより他の恋をば鼻ひ
 負いきにする客もなく、線香の煙り絶たえだえ々になるにつけても、よしや
 わざくれ身は朝顔のと短き命、捨撥すてばちにしてからは恐ろしき者に
 いうなる新徴組しんちようぐみ何の怖こわい事なく三筋取つても一筋心ひとすじごころに君
 さま大事と、時を憚はばかり世を忍ぶ男を隠匿かくまいし半年あまり、苦勞の
 中にも助る神の結び玉たまいし縁なれや嬉しき情の胤なさけを宿して帯の祝
 い芽出度めでたくの舒びし眉間みけんに忽ち皺なみちの浪立て騒がしき鳥羽伏見の戦争。
 さても方様かたさまの憎い程な氣強さ、爰こゝなり丈夫の志を遂ぐるはと一ひ
 卜群むれの同志どうしを率いて官軍に加わらんとし玉たまうを止むるにはあらね
 ど生しょうじ死争しゆうじう修羅しゆらの巷ちまたに踏入ふみいりて、雲のあなたの吾妻里あづまじ、空寒あづまじき
 奥州おうしゆうにまで帰る事は云いわずに旅立たびだち玉たまう離別わかれには、是これを出世

の御発途おんかどいでと義理ぎとで暁さとして雄々おおしき詞ことばを、口くちに云いわする心こころが真情まこと
 か、狭せまき女の胸むねに余あまりて案あんじ過すごせば潤うるむ眼めの、涙なみだが無な理りかと、粹すい
 ほど迷まよう道みち多くて自分おのれながら思おもい分わたず、うろくする内うち日は消たち
 て愈よ 《いよいよ》となり、義よし経つ袴ねばかまに男おとこ山こやま八幡はちまんの守まもり
 くけ込んで愚おろかなと笑わら片かた頬ほに叱しかられし昨日きのうの声こゑはまだ耳みみに残のこるに、
 今いま、今いまの御姿おすがたはもう一里いちり先さきか、エ、せめては一日いちにち路程ちぢも見透みとお
 したきを役立たぬ此眼ただの腹立だたしやと門辺かどべに伸のび上ありての甲斐かいなき繰く
 りりごとも尤もつともなりき。一ひ月過つきごとぎ二ふ夕月過すぎても此恨このらめん綿めん々々ろろうう
 として、筑紫つくしごと琴習ことう隣家となりの妓こがうたう唱歌うたも我われに引ひき較くらべて
 絶たゆる事ことなく悲かなしきを、コロリン、チャンと済すまして貰もらい度たしと無な
 慈悲あまのなでの借金取かめが朝あに晩あにの掛合かけあい、返答おまつも力ちから無なや男松おまつを離はなれし

ひめづた 姫 薦の、斯も世の風に 飄らるる、者かと俯きて、横眼に交張りの、
 ふくろど 袋戸に 広重が 絵見ながら、悔しいにつけゆかしさ忍ばれ、方か
 たさま 様 早う 帰つて 下されと 独ひとりごと 言ひ 口を 洩もるれば、利足も 払わず 帰
 れとはよく云えた事と 吠ほえつれ。ア、大きな声して 下さるな、あ
 なたにも似合わぬと云いさして、御腹には 大じ事の 我子では な
 い顔見ぬ 先からいとしゆうてならぬ方かた 様さま の 紀か念たみ、唐土には 胎
 教という事さえありてゆるがせならぬ者と 或夜あるよの物語りに 聞しに
 此ありさまの口くち 惜おしと腸はらを断つ 苦しさ。天女も 五衰ごすいぞかし、玳たい
 瑁まいの櫛くし、真珠の 根掛ねがいつか無くなりては華鬢けまんの美しかりける 倅おも
 とどまらず、身だしなみ 懶ものうくて、光ると云われし色いろ 艶つや 屈く 托たくに
 曇り、好みの衣い裳しよう 数々 彼に 取られ是これに 易かえては、着古しの 平ふ常だ

衣んぎ一つ、何たきの焼かけの靈れいきよう 香おと薫ばくちずべきか、泣おちき寄ふれりの親しんみ身に一
 人おとの弟ととは、有おとつても無おときに劣おとる賭博ばくち好おちき酒ふれ好おちき、落おち魄ふれて相談相
 手おとになるべきならねば頼おとむは親切ばくちな雇やとい婆い計ばり、あじきなく暮
 らす中月うち満みちて産うぶ声ご美ゑるしく玉わのような女の子こ、辰たつと名付づけられしは
 あの花はな漬なづけ売けりなりと、是これも昔いは伊勢せ参宮ごりの御利益やくに粹すいという事
 覚おやえられしらしき宿屋しの親爺おやじが物語ばなしに珠運たまごも木像きざうならず、涙掃はらつ
 て其その後のちを問まえば、御待おまちなされ、話わしの調子てうしに乗のつて居ゐる内うち、炉
 の火ひが淋さみしゆうしゆうなりました。

第三

如是性によぜしやう

上 母は嵐あらしに香かの迸はしる梅

やまが 山家の御馳走ごちそうは何処いずくも豆腐湯波干ゆぼからぎけぼか 鮭計さけかりなるが今宵こよいはあなた
 が態々わざわざ 茶の間に御出掛おでかけにて開化かいけの若い方かたには珍めづらしく此この兀爺はげじい
 の話を冒頭あたまから潰つぶさずに御聞おききなさるが快かければ、夜長よるながの折柄おりからお
 辰たつの物語ものがたりを御馳走ごちそうに饒しゃべり舌しりましよう、残念ざんねんなは去年こぞならばもう

少し面白くあわれに申し上あげて軽薄けいはくな京の人イヤ是これは失礼、やさ
 しい京おかたの御方おかたの涙を木曾きそに落おとさせよう者を惜おしい事には前齒
 一本欠けた所ところから風が洩もれて此春以来御文章おふみさまを讀よむも下手になつ
 たと、菩提所ぼだいしよの和尚おしよう様に云いわれた程なれば、ウガチとかコガ
 シとか申す者は空拔うろぬきにしてと断りながら、青内寺煙草二三服せいないじたばこ
 馬士張まごばりの煙管きせるにてスパリくと長閑のどかに吸すい無遠慮ほだに櫛くさし焼くべ
 て舞まい立つ灰ゆきんばかまの雪ゆき袴はたに落きたち来るをぽんと擲はたきつ、どうも私幼
 少よみほんから讀よ本ほんを好きました故ゆえか、斯こういう話を致いたしますると凶にんがに乗しやべつ
 つておかしな調子になるそうにんがで、人我しやべつの差別にんがも分り憎おゆるしくなると
 孫まごども共に毎度笑おききわれますが御聞おききづらくも癖かむゆならば癖かむゆぞと御免おゆるし
 なされ。さてもそののち室香むろかはお辰かむゆを可愛かわゆしと思しうより、情じやうには

鋭き女の勇氣をふり起して昔取つたる三味の撥、再び握つても色
 里の往来して白痴の大尽、生な通人めらが間の周旋、浮れ車
 座のまわりをよくする油さし商売は嫌なりと、此度は象牙を柀
 に易えて児供を相手の音曲指南、芸は素より鍛鍊を積たり、
 品行は淫ならず、且は我子を育てんという氣の張あればおのずか
 ら弟子にも親切あつく良い御師匠様と世に用いられて爰に生計
 の糸道も明き細いながら炊煙絶せず安らかに日は送れど、稽古す
 る小娘が調子外れの金切声かなきりごえ今も昔わーワツとお辰のなき立つ事
しばしばの屢なるに胸苦しく、苦勞ある身の乳も不足なれば思い切つて近
 き所へ里子にやり必死となりて稼ぐありさま余所の眼さえ是を見
 て感心なと泣きぬ。それにつれなきは方様の其後何の便もな

く、手紙出そうにも あてどころ 当所分らず、まさかに親子笈おいづるかけて
 順礼にも出られねば逢あう事は夢に計りばか、覚めて考うれば口をきか
 れなかつたはもしや流丸それだまにでも中あたられて亡くなられたか、茶
 絶ちしおだち塩絶しおだちきつとして祈るを御存知ない筈はずも無かろうに、神様も
 恋しらずならあり難くなしと愚痴いっしよと一所にこぼるゝ涙流れて止
 らぬ月日をいつもく憂あかうらみいに明し恨わがとしに暮らして我齡の寄るは知ね
 ども、早い者お辰はちよろゝ歩行あるき、折ふしは里親と共に来てま
 わらぬ舌に菓子ねだる口元、いとしや方様に生き写しと抱き寄せ
 て放し難く、遂ついに三歳みつつの秋より引き取つて膝下ひざもとに育そだつれば、少し
 は紛まぎれて貧家に温ぬくき太陽ひのあたる如く淋さびしき中にも貴わらいき笑の唇に
 動きしが、さりとは此子このこの愛らしきを見様みようとも仕玉したまわざるか帰か

家えられざるつれなき、子供心にも親は恋しければこそ、父ととさま様御帰
 りになつた時は斯こうして為する者ぞと教えし御辞誼おじぎの仕様しようよ能く覚えて、
 起居たちいふるまい動作どうさのしとやかさ、能く仕付しつけたと誉ほめらるゝ日を待まちて居るに、
 何処どこの竜りゅうぐう宮みやへ行かれて乙おとひめ姫ひめの傍そばにでも居おらるゝ事ぞと、少
 しは邪推りんききざの悋気りんききざ萌もすも我を忘れられしより子を忘れられし所には
 起る事、正しき女にも切なき情じやうなるに、天道怪しくも是これを恵あまず。
 運さいは賽さいの眼でどころの出でどころ所分らぬ者にてお辰の叔父おじぶんなげの七しちと譚名あだな
 取りし蕩樂者どうらくもの、男は好よけれど根性凶太たれく誰たれにも彼にも疎うとまれて
 大の字に寝たとて一坪には足らぬ小さき身を、広き都に置きかね
 漂ただよ泊いあるきの渡り大工、段々と美濃路みのじを歴へて信濃しなのに來きたり、折し
 も須原すはらの長者何がしの隱居所すはら所作る手伝い柱を削れ羽目板つけを付つけると

棟 梁とうりようの差さ図ずには従したがえど、墨すみ繩なわの直すなには倣ならわぬ横おう道どう、お

吉きち様ちやうと呼よばせらるゝ秘ひ藏ざうの嬢ぢやう様にやさしげな濡ぬれを仕し掛かけ、かんなく 鉋かんとく

屑ずに墨すみさし思おもいを云いわせでもしたるか、とうくそゝのかしてと

んでもなき穴あな掘ほり仕事しごと、それも縁ゆかりなら是非せいひなしと愛あいに暗くらんで男おとこの

性質しやうも見み分わけぬ長なが者のえせ粹すい三さん国こく一いつの狼おおかみ 婿むこ、取とつて安あん堵どしたと

知らぬが仏ぶつ様に其その年としなられし跡あとは、山い林えん家か蔵ざう椽えんの下の糠ぬか味み噌そう瓶びん

まで譲ゆづり受うけて村むら中ぢゆう寄より合あひの席せきに肩かたぎしつかせての正しょう坐ざ、片ぺん

腹はら痛いたき世よや。あわれ室むろ香かはむら雲う迷めい野の分わけ吹ふく頃ころ、少せうしの風ふう邪じゃに

冒もうされてより枕まくらあがらず、秋あきの夜ひ冷やかに虫むしの音ね遠とほざかり行いくも観くわん念ねん

の友ともとなつて独ひとりり寢ね覚ざめの床とこ淋しみしく、自みづから露つゆ霜しものやがて消きぬべきを

悟さとり、お辰すし素しょう性じやうのあらまし慄ふるう筆ふでのにじむ墨すみに覚おぼつか束つかなく認したた

て守り袋に父が書き捨すての短冊たんざく一トひらと共に蔵おさめやりて、明日
 をもしれぬ我がわがなき後頼りなき此子このこ、如何いかなる境界おつに落るとも加か
 茂もの明神も御憐愍ごれんみんあれ、其人そのひと命あらば巡り合あわせ玉たまいて、芸子げいこ
 も女なりやさしき心入れ嬉うれしかりきと、方様の一ひとこと言を草葉かげの蔭
 に聞きせ玉たまえと、遙ようはい拝して閉じたる眼をひらけば、燈とも火しび僅わずに螢
 の如く、弱き光りの下もとに何の夢見て居るか罪のなき寝顔、せめて
 もう十計とおりも大きゆうして銀杏いちようまげ鬚結わしてから死にたしと袖そでを
 噛かみて忍び泣く時お辰おそ魘おそわれてアツと声立て、母様かかさま痛いよ〜
 坊ぼうの父様ととさまはまだ帰かえらないかえ、源げんちゃんぶが打ぶつから痛いよ、
とと父の無いのは犬の子だつてぶつから痛いよ。オ、道もつとも理りじやと抱
 き寄よすれば其儘そのまますやく〜と睡ねむるいじらしさ、ア、死なれぬ身やの疾

病まい、是これほどなさけなき者あろうか。

下 子は岩いわ蔭かげに咽むせぶ清しみず水みづよ

格子戸こうしどがらくとあけて閉しめる音しずかは静しずかなり。七しち蔵ぞう衣い装しょう立りゅう派ぱいに
 着き飾かざりりて顔かほ付つ高たか慢まんくさく、無ぶ沙さ汰た謝わびるにはあらずで誇げり氣げに今いまの身み
 となりし本ほん末まつを語かたり、女によう房ぼうに都みやこ見み物もの致いたさせかた／＼御お近ち付かづ
 に連つれて参まゐつたと鷹おお風ふうなる言こと葉はの尾おしにつきて、下くだぐる頭かしら低ひくくしと
 やかに。妾わたくしめは吉きちと申まをす不ふ束つつな田で舎しゃ者わ、仕し合あせに御ご縁ふしの端はしに続つな
 がりました上うへは何なに卒そと末まつ長ながく御お眼めかけられて御ご不ふ勝しょうながら真しん実み
 の妹いもうととも思おもしめされて下くださりませと、演のぶる口くち上に樸すな厚おなる山やま家が育が

ちのたのもしき所見えて室香嬉敷、重き頭をあげてよき程に挨あ
いさつ搦すれば、女心の柔なる情ふかく。姉様あねさまの是これほどの御病氣、
ことさら殊更御幼少おちいさいのもあるを他人任せにして置きまして祇園清水金ぎおきよみず
 銀閣見たりとて何の面白かるべき、妾わたしは是これより御傍おそばさらず御看病
 致いたしましよと云いえば七蔵つらぶく顔膨らかし、腹うちの中には余計ななと思ない乍
 ら、ならぬとも云い難く、それならば家も狭しおれ丈だケは旅宿に
 帰るべしといそのつて其晩は夜食の膳ぜんの上、一いっしやく酌の酔よいに浮うかれてそゞ
 ろあるき、鼻歌に酒の香かを吐き、川風寒かき千鳥足、乱あれてほんと
 町かわばたか川端あたりに止とどまりし事あさまし。室香はお吉あに逢あいてよ
 り三日目、我子わがこを委ゆだぬる処ところを得て気も休まり、爰こゝぞ天の恵み、臨
 終しょうねん正念あたがわず、安やすらかなる大往生、南無阿弥陀仏なむあみだぶつは嬌きようこう喉

に粹すいの果はてを送り 三さん重じゆう、鳥部野とりべの一片けむりの烟けむりとなつて御法みのりの風かぜに舞
 い扇あふぎ、極楽ごくらくに歌舞かぶの女にょ菩薩ぼさつ一いち員にん増ましたる事こと疑ぎいなしと様子ようす知
 りたる和尙おしやうさま様さま随喜ずいきの涙なみだを落おとされし。お吉きち其その儘ままあるべきにあら
 ねば雇ぼぼい婆ばには銭かねやつて暇ひま取とらせ、色々いろいろ片かたづ付くるとて持じ仏ぶつ棚たなの
 奥おくに一つひとつの包つづみもの物ものあるを、不思議ふしぎと開ひらき見みれば様々さまざまの貨幣かね合あせ
 て百円ひゃくえん足たらず、是こゝろはと驚おどきて能よくよく々々見みるに、我身わがみ万ま一の時ときお辰たつ引ひ
 き取とつて玉たまわる方かたへせめてもの心こゝろ許ゆるりに細こき暮くらしの中うちより
 一いち銭せん二に銭せん積たみ置おきて是こゝろをまいらするなりと包かみみ紙しに筆ふでの跡あと、読よみ
 さして身みの毛け立たつ程ほど悲かなしく、是こゝろまでに思おもい込こまれし子こを育そだてず
 置おかべべきかと、遂ついに五いつつ歳さいのお辰たつをつれて夫おつとと共に須原すはらに戻もどりける
 が、因果いんぐわは壺つぼ皿ざらの縁ふちのまわり、七なな歳さい本性ほんしやうをあらわして不足ふそくなき

身に長半をあらそえば段々悪徒の食物くいものとなりて瘦やせる身代の行ゆ
くすえ末きづかを氣遣い、女房うるさく異見いけんすれば、何の女の知らぬ事、び
 んからきりまで心得て穴あな熊毛綱くまけづなの手品てづまにかゝる我ならねば負まく
ばかる計りの者にはあらずと駈かけ出しだしして三日帰らず、四日帰らず、或あるい
 は松本善光寺又は飯田高遠いいたかとおあたりの賭場とばあるき、負まくれば尚なおも盜ど
ろぼう賊ぞくに追おい銭ぜにの愚おろを尽し、勝かてば飯めし盛もりに祝いわい酒さけのあぶく銭ぜにを費つ
このくせす、此こ癖くせ止とめて止とまらぬ春駒はるごまの足搔あが早く、坂道さかみちを飛とび下くだるよ
すみやかり迅すみに、親譲りの山も林もなくなりかゝつてお吉心配おきちんぱいに病死びやくせし
としわづかとおより、齡としは僅わずかに十の冬、お辰浮世うきよの悲かなしみを知しりそめ叔父おじの歸宅かえら
とほうぬを困こり途方とほうに暮くれ居いたるに、近所きんじよの人々ひと、彼奴きやつめ長久保ながくぼのあや
もとしき女の許もとに居い続つづして妻さいごの最期さいごを余所よそに見みる事憎にくしとてお辰を

あわれみ助け葬ともらいすま式済しつしたるが、七蔵こののちよいまもちほうらつ此この後のち愈よ身み持もち放ほう埒らつとなり、
 村内むらの心こころある者ものには爪つまはじきせらるゝををもかまわず遂ついに須原すげの長なが
 者ものの家敷やしきも、空むなしく庭中うちの石燈籠いしどうろうに美こけしき苔こけを添そえて人ひと手に渡わた
 し、長屋門ながやどのうしろに大木おほきの樅もみの梢こずえ吹ふく風かぜの音ねばかり、今いまの耳みみに
 も替かわらずして、直すぐ其その傍そばなる荒屋あばらやに住すまいぬるが、さても下駄げたの
 齒はと人の氣風きかぜは一度いちどゆがみて一代いちだいなおらぬもの、何なに一ひとトつ満み足あな
 る者ものなき中なかにも盃さかずきのみ欠かけず、柴木しばきへし折しつて箸はしにしながら象ぞ
 牙うげの骰さい子こに誇おほるこそ愚おろなれ。かゝる叔父おんちちを持もつ身みの当惑おんたげ、御嶽おんたけ
 の雪ゆきの肌清はだらかに、石いし楠くすのぎの花はなの顔氣けだか高たかく生なれ付つてもお辰あつちを嫁よめ
 にせんという者もの、七蔵しちざうと云いう名なを聞きては山やま抜ぬけ雪流ゆきなだれより恐おそろしく
 おぞ毛けふるつて思おもい止とまれば、二十にじゅうを越こして痛いたましや生きむすめ娘むすめ、昼ひるは

賃仕事に肩の張るを休むる間なく、夜は宿中の旅籠屋廻りて、
 元は穢多かも知れぬ客達にまで黻なぶられながらの花漬売、帰か
 途えりは一日の苦勞の塊かたまり銅貨幾箇いくつを酒に易かえて、御淋おさびしゆう御座り
 ましたろう、御不自由で御座りましたろうと機嫌取りどり笑顔えがおし
 てまめやかに仕うるにさえ時々は無理難題、先度せんども上田うえだの娼妓じょうぎ
 になれと云い掛かしよし。さりとは胴慾どうよくな男め、生餌食いきえう鷹たかさ
 え暖ぬくめ鳥は許す者を。

第四
 如是因によぜいん

上 忘れぬのが根本こんぽんの情じょう

珠しゆう運うんは種さま々ざまの人のありさま何と悟るべき者とも知らず、世
 のあわれ今宵こよい覚えて屋やの角に鳴る山風寒さ一段身に染しみ、胸痛き
 までの悲あはしさ我わが事ことのように鼻詰はなづめらせながら亭主ていしゆに礼れい云いいておの
 が部屋へやに戻もどれば、忽たちまち氣きが注つは床とこの間に二夕箱ふたゆふばこ買かつたる花はな漬づけ、衣きぬ

脱ぎかえてころ転りと横になり、夜着引きかぶればありくと浮ぶお
 辰の姿、首さし出していだ眼をひらけば花漬、閉ればおもかげ、是は
 どうじやと呆れてあきまた候眼をあけば花漬、ア、是を見ればこそ浮
 世話も思いの種となつて寝られざれ、明日は馬籠峠越えて中
 津川がわ迄行かんとするに、能く休までは叶わじと行燈吹き消し
 意を静むるに、又しても其美形、エ、馬鹿ばかなど活と見ひらき天井
 を睨む眼に、此度は花漬なけれど、闇はあやなしあやにくに梅の
 花の香は箱を洩れてもと枕に通えば、何となくときめく心
 を種として咲も咲たり、桃の媚桜の色、さては薄荷菊の花まで今
 真盛りなるに、蜜を吸わんと飛び来る蜂の羽音どこやらに聞ゆ
 る如く、耳さえいらぬ事に迷つては愚なりと瞼堅く閉じ、搔卷

頭こうべを蔽おほうに、さりとは怪けしからず麗うるわしき幻まぼろしの花輪あいきよの中に愛
 嬌うを湛たえたるお辰、気高ばかき計はかりりか後光もろろ朦朧ととさして白衣びやくえの
 観音、古人にも是程これの彫ほりなしと好すきな道みちに慌惚うつとりとなる時、物ひびきの響
 は冴さゆる冬の夜、台所に荒ねずみれ鼠ねずみの騒さわぎ、憎にくし、寝ねられぬ。

下 思いやるより増長の愛

裏うら付つき股もも引ひきに足あしを包かみて頭づきん巾きん深ふか々々とかつぎ、然しかも下したには帽子
 かぶり、二重ふたへとんびの扣ぼたん鈕そう惣げ掛かになし其その上うへ首筋くびすぢ胸むねの周まわり圍り、手
 拭ぬぐいにて動ゆるがぬ様よう縛ばり、鹿しかの皮かわの袴はかまに脚きや半はん油あぶら断たなく、足袋あしひら二枚
 はきて藁わら沓くつの爪つま先に唐辛とうがらし子こ三四本さんしよほん足を焼やぬか為ため押し入れ、毛皮

の手てつこう甲もしして若ももの時ときの助かんじきけに足せなか櫃までまで脊せなか中に用意用意、充分充分して
 さえ此この大吹雪こざえ、容易容易の事ことにあらず、吼ほえたつ立たつる天津風あまつかぜ、山山鳴動山山鳴動
 して峰こざえの雪こざえ、梢こざえの雪こざえ、谷こざえの雪こざえ、一齊一齊に舞立舞立つ折折は一一寸先見先見え難難く、
 瞬またたくま間みちうずに路みちを埋うずめ、脛はぎを埋うずめ、鼻あなの孔あなまで粉雪粉雪吹吹込んで水おほに溺おほ
 れしよりまだくく苦苦し、まましてや准備よういおろかなる都都の御客お様様なん
 ぞ命惜おしくば御逗留ごとうりゆうなされと朴ぼくとつ訥訥は仁仁に近近き親切親切。なるほど話話
 し聞きいてさえ恐恐ろしければ珠しゆうん運別運別段急段急ぐ旅旅にもあらず。されば今今
 日丈だけの厄やつかい介介になりましようしようと尻しりを炬燵こたつに居すえて、退屈退屈を輪輪に吹吹く
 煙草たばこのけぶり、ぼんやりとして其辺見そこら回回せば端端なく眼めにつく柘植つげ
 のさし櫛くし。さては花漬はなづけ売うりが心心づかず落落し行ゆきしかと手手に取取るとた
 ん、早はや其そのひと人床ゆかしく、昨夕ゆうべの亭主亭主が物語物語今更今更のようように、思思い出出

されて、叔父おじの憎きにつけ世のうらめしきにつけ、何となく唯ただお
 辰可愛く、おれが仏なら、七蔵頓死しちぞうとんしさして行衛ゆくえしれぬ親にはめ
 ぐりあわせ、宮内省くないしょうよりは貞順善行の緑りよくじゆ 綬紅綬紫綬、あり
 丈たけの褒章頂かせ、小説家には其そのあわれおもしろく書かせ、祐
 信長けのぶちようしゆんら 春等はるとうを呼び生いかして美しさ充分に写させ、そして日本一
 大々だいたいじん 尽の嫁にして、あの雑綴つぎつぎの木綿着を綾羅錦繡りようら きんしゆうに易か
 え、油氣少きそ、け髪に極上ごくく々 正真伽羅梅檀しょうじんきやらせんだんの油付つけさせ、握に
 飯ぎりめし ほどな珊瑚珠さんごじゆに鉄火箸かなひばしほどな黄金脚きんあしすげてさゝしてや
 りたいものを神通じんつうなき身の是非もなし、家財うち売つて退のけて懐中
 はまだ三百兩余よあれど是これは我身わがみを立たつる基もと、道中にも片足満足な草わ
 鞋らじは捨すてぬくらい儉約つましくして居るに、絹絞きぬしぼり 絞はんの半掛はんがけ一トつたり

とも空あだに恵む事難し、さりながらあまりの慕わしき、忘られぬ殊
 勝ぜんさ、かゝる善ぜん女にに結縁けちえんの良よき方便べんぽうもがな、噫あ思い付つたりと
 小行李ここうりとくく小刀こがたな取出し小こさき砥石といしに鋒きつさき尖銳とく礪とぎ上げ、
 頓やがて櫛くしの棟むねに何やら一日掛りに彫り付つけ、紙に包んでお辰来らばど
 の様な顔するかと待ちかけしは、恋は知らずの粹すい様さまめ、おかし
 き所しよぎ業ようあてが外れて其晚吹雪尚なおやまず、女の何としてあるか
 るべきや。されば流れざるに水の溜たまる如ごとく、逢あわざるに思おもは積いり
 て愈いよなつかしく、我は薄暗うすき部屋うちの中、煤すすびたれども天井の下、
 赤くはなりてもまだ破やれぬ畳の上に坐ざし、去歳こぞの春はるすが漏もりたる
 か怪あやしき汚し染みは滝の糸を乱して画襖えぶすまの李り白はくの頭かしらに濺そそげど、たて
 付つけよければ身の毛立程たつの寒ふさを透すき間に啣かこちもせず、兎とも角かくも安楽

にして居るにさえ、うら寂しく自悲を知るに、ふびんや少女の、
おのがならみ

あばら屋といえば天井も無かるべく、屋根裏は柴焼く煙りに塗ら
な しばた

れてあやしげに黒く光り、火口の如き煤は高山の樹にかゝれる
ほくち こうざん き

猿尾枷さるおがせのようにさがりたる下に、あのしなやかなる黒髪引詰
ひきつめ

に結うて、腸見はらわたえたるぼろ畳の上に、香露凝る半に壁尚
こうろこ なかば たまお 《いま

いま》しそうに睨ねめたる眼めをジロリと注ぎ、裁縫しごとに急がしき手を

止とめさして無理な吩いいつけ附、跡引き上戸の言葉は針、とがくしきに

胸を痛めて答うるお辰は薄着の寒さに慄ふるう歟唇かちびる、それに用捨ようしゃも

あらし風、邪見に吹くを何防ぐべき骨露あらわれし壁一重ひとえ、たるみの出

来たる筵屏風むしるびようぶ、あるに甲斐かなく世ふを経れば貧には運も七分凍り
しちぶご お

て三分さんぶの未練を命いきに生るか、噫あと計ばかりに夢ゆめ現分うつつわかたず珠運たんは歎

ずる時、雨戸に雪の音さらくとして、火は消ぎえざる炬燵こたつに足の先
冷つめたかりき。

第五

如是作によぜさ上 我を忘れて而生其心にしようごしん

よしや脊せに暖あたならずとも旭あさ日ひきららくとさしのぼりて山々の峰
 の雪に移りたる景色、眼めも眩くらむ許ばりの美しさ、物もの腥ぐき西洋ちりの塵
 も此ここ処こまでは飛とんで来とず、清しやうじやう 浄じやう 潔けつ 白はく 実げに頼たの母も敷し岐き蘇そ路じ、日本
 国の古風残りて軒近く鳴く小鳥の声、是これも神代を其その儘ままと詰つまらぬ

者をも面白く感ずるは、ゆうべ あらし 昨宵の嵐去りて跡なく、雲の切れ目の所、青空見ゆるに人の心の悠々とせし故なるべし。しゅうん 珠運梅干涉
 茶に夢を拭い、ぬぐ 朝飯平常よりはんふだん うま 甘く食いて泥を踏まぬどろ 雪沓軽く、
ひょうひょう ひょうひょうと立出しが、折角吾志を彫りしわがろがし 櫛与えざるも残念、家
おやしき 飄々として立出しが、折角吾志を彫りし櫛与えざるも残念、家は宿の爺に聞て街道の傍を僅折り曲りたる所と知れば、立ち寄り
 て窓からでも投込まんと段々行くに、果せるはた 哉縦の木高く聳えて
 外圍い大きく如何にも須原の長者が昔の住居と思わるゝ立派なる
 家の横手に、このごろ 此頃の風吹き曲めたる荒屋あり。近付くまゝに
うち 中の様子を伺えば、ひっそり 寥然として人のありとも想われず、是は不
 思議とやぶれ戸に耳を付て聞けばひそひそ 竊々と呟やくような音、いよいよ 愈あ
なお やしく尚耳を澄せばすす 啜り泣する女の声なり。さては邪見なしちぞう 七蔵

め、何事したるかと彼あちこち此さがして大きな節ふしの抜けたる所より
 覗のぞけば、鬼か、悪魔か、言語同断、当世の摩利夫人まりとさえ此この珠運
 が尊うしろく思ひし女を、取つて抑えて何者の仕業ぞ、酷むごらしき繩から
 げ、後の柱のそげ多きに手荒く縛くくし付け、薄汚なき手てぬぐい拭無遠慮
 に丹花たんかの唇を掩おおいし心無さ、元結もとゆい空にはじけて涙の雨の玉を貫
 く柳の髪うらみ恨は長く垂れて顔にかゝり、衣きぬ引まくれ胸あらわに、膚はだえ
 は春あけぼのの曙の雪今や消入きえらん計ばかり、見るから忽ち肉たちま動き肝躍きもつて分
 別思案あらばこそ、雨戸蹴けひらき飛とび込で、人間の手の四五本な
 き事もどかしと急燥いらつまで忙いそがわしく、手拭すを棄て、繩を解ふき、懐中
 より櫛くし取り出して乱れ髪梳すけと渡しながら冷え凍こおりたる肢からだ体を痛
 ましく、思わず緊しつかり接抱いだき寄せて、嘸さぞや柱に脊中がと片手に摩なで

擦さするを、女あきれて兎角とかくの詞ことばはなく、ジツと此方こなたの顔を見つめ
 らるゝにきまり悪くなつて一ト足離れ退のくとたん、其辺そこらの畳雪だ
 らけにせし我わが沓くつにハツと気が注つき、訳わけも分らず其まゝ外へ逃げ
 出し、三間ばかり夢中に走れば雪に滑りてよろゝゝ、あわや
 膝突ひざかんとしてドッコイ、是は仕したり、蝙蝠傘こうもりがさ手荷物忘れたか
 と跡あともどりする時、お辰門口たつに來り袖そでを捉とらえて引くにふり切れず、
 今更余計な仕業したりと悔むにもあらず、恐るゝにもあらねど、
 一生おぼえに覚なき異な心持するにうろつきて、土間に落散る木屑きくずなん
 ぞの詰つまらぬ者に眼を注あがぎ上り端はなに腰かければ、しとやかに下げた
 る頭かしらよくも挙げ得ず。あなたは亀屋かめやに御出おいでなされた御客様わたく
 しの難儀を見かねて御救おすくい下されたは真まことにあり難けれど、到底とてあが遁が

れぬ不仕合ふしあわせと身をあきらめては断念あきらめなかつた先程までの愚おろかが
 却かえつて口惜くちおしゆう御座りまする、訳わけも申さず斯こう申しては定めて道理
 の分らぬ奴やつめと御軽侮おさげすみも耻はずかしゆうはござりまするし、御慈悲深
 ければこそ縄とまで解とて下さった方に御礼も能よくは致さず、無理ねがいな願
 を申すも真まことに苦しゆうは御座りまするが、どうぞわたくしめを元
 の通りお縛りなされて下さりませと案ほかの外の言葉に珠運驚これき、是
 はくゝとんでもなき事、色々入り込んだ訳わけもあるうがさりとては
 強つれなき面御頼おたのみ、縛やつった奴やつを打ぶてとでも云いうのならば瘦腕やせうでに豆計ぼかり
 の力ちから 瘤こぶも出でしましたようが、いとしゆうていとしゆうて、一日
 二晩絶間たえまなく感心あつぱれしつめて天晴菩薩あつぱれぼさつと信仰おまえさまして居る御前様を、
 縛むすることは赤旃檀しやくせんたんに飴細工あめざいくの刀ほりで彫ほるよりまだ難むづかし、

おととい 一昨日の晩忘れて行かれたそれ／＼その櫛を見ても合点がてんなされ、
 一体は亀屋の亭主に御前の身の上あらまし聞きて、失礼ながらかわい愍
そう然な事や、私わたしが神か仏ならば、斯こうもしてあげたい彼あもしてやり
 度たいと思いましたが、それも出来ねばせめては心こころ計ばかり、一日肩を
 凝ようらして漸やく其その彫ほりをしたも、若もしや御髪おぐしにさして下さらば一生に
 又なき名譽、嬉うれしい事と態わざ々わざ持参して来て見れば他よそにならぬ今
 のありさま、出過ですぎたかは知りませぬが堪忍こらがならで縄も手拭も取
 りましたが、悪いとあらば何とでも謝罪あやまりましょ。元の通りに縛
 れとはなさけなし、鬼と見て我おたの御頼のみか、金輪こんりん奈落ならく其その様ような義
 は御免蒙ごうむると、心清き男の強く云うをお辰聞あつさわずかながら、櫛を手にし
 て見れば、ても美しく彫ほりに彫ほつたり、厚あつは僅いに一分いちぶに足らず、幅は

漸く二分計り、長さも左のみならざる棟に、一重の梅や八重桜、
 桃はまだしも、菊の花、薄荷の花の眼も及ばぬまで濃きを浮き彫
 にして香う計り、そも此人は如何なればかゝる細工をする者ぞ
 と思うに連れて瞳は通い、竊に様子を伺えば、色黒からず、口元
 ゆるまず、眉濃からずして末秀で、眼に一点の濁りなきのみか、
 形状の外におのずから賤しからぬ様露れて、其親切なる言葉、そ
 もや女子の嬉しからぬ事か。

中 仁はあつき心念口演

身を断念てはあきらめざりしを口惜とは云わるれど、笑い

顔してあきらめる者世にあるまじく、大抵たいていは奥歯おくは噛かみしめて思
 い切る事ぞかし、到底とてものが遁のがれぬ不仕合ふしあわせと一概いぱいに悟さとられしはあまり
 浮世を恨みすぎた云い分、道理には合あつても人情には外はずれた言葉
 が御前おまえのその美しい唇くちびるから出るも、思えば苦しい仔細しさいがあつてと
 察さしては御前の心も大方は見えていじらしく、エ、腹はら立たしい三
 世相んぜそう、何の因果を誰たれが作つつて、花に蜘蛛くもの巣お前に七蔵しちぞうの縁
 じややらと、天燈てんとうさま様まで憎にくうてならぬ此珠このしゆうん運、相談あいての敵手あいてに
 もなるまいが痒かゆい脊中せなかは孫の手に頼たのめじや、なよなよとした其そのか
 肢体らだを縛しばつてと云うのでない注文あたまならば天窓あたまを破わつて工夫くわも仕し
 様ようが一体いまあどうした訳わけか、強しいて聞きくでも無なれど此このまま儘別まれては何
 とやら仏作ぶつつて魂入たまれずと云う様な者、話わしてよき事ことならば聞きいた

上でどうなりと有丈あるたけの力喜んで尽しまししようと云れてお辰は、
 叔父おじにさえあさましき難題なんだい云い掛かけらるゝ世の中に赤の他人これでは
 ほどの仁なまけ、胸こたに堪えてぞつとする程嬉うれし悲しく、咽むせ返りながら、
 吃きつと思いかえして、段々の御親切がとう有り難は御座りまするが妾身わたくしの
 上話しは申し上ませぬ、否いいや申さぬではござりませぬが申されぬ
 つらさを御察おし下され、眼上めうえと折り合あねば懲こらしめられた計ばかりの事、
 諄々くどくどと黒暗くらやみの耻はじを申てあなたの様な情知なさけりの御方に浅墓あさはかな
 心こころ入いれと愛想あいそつかさるゝもおそろし、さりとして夢さら御厚意ないがしろ蔑
 にするにはあらず、やさしき御言葉は骨こに鏤きざんで七生忘れませぬ、
 女子おなごの世に生れし甲斐かい今日知りて此嬉このしさ果敢はかなや終り初物はつもの、
 あなたは旅の御客、逢あうも別れも旭日あさひがあこの木梢こずえ離れぬ内、せめて

は御荷物なりとかつぎて三戸野馬籠あたりまで御肩を休ませ申し
 たけれどそれも叶わず、斯云う中にも叔父様帰られては面倒、
 どの様な事申さるゝか知れませぬ程にすげなく申すも御身の為、
 御迷惑かけては済ませぬ故どうか御帰りなされて下さりませ、エ
 、千日も万日も止めたき願望ありながら、と跡の一句は口に洩れ
 ず、薄紅となつて顔に露るゝ可愛さ、珠運の身になつてどう
 ぶりすてらるべき。仮令叔父様が何と云わりようが下世話にも云
 う乗りかゝつた船、此儘左様ならと指を噉えて退くはなんぼ上
 方が産の胆玉なしでも仕憎い事、殊更最前も云うた通りぞ
 つこん善女と感じて居る御前の憂目を余所にするは一寸の虫に
 も五分の意地が承知せぬ、御前の云わぬ訳も先後を考えて大方

は分つて居るから兎も角も私の云事に付たがよい、悪氣でする
 ではなし、私の詞を立て呉れても女のすたるでもあるまい、斯し
 ましよ、是からあの正直律義は口つきにも聞ゆる亀屋の亭主に御
 前を預けて、金も少しは入るだろうがそれも私がどうなりとして
 婿を明ましてよう、親類でも無い他人づらが要らぬ差出た才覚と思
 わるゝか知らぬが、妹という者持ても見たらば斯も可愛い者であ
 ろうかと迷う程いとしゆうてならぬ御前が、眼に見えた艱難の
 淵に沈むを見ては居られぬ、何私が善根為たがる慾じやと笑うて
 氣を大きく持がよい、さあ御出と取る手、振り払わば今川流、握
 り占なば西洋流か、お辰はどちらにもあらざりし無学の所、無類
 珍重嬉しかりしと珠運後に語りけるが、それも其時は嘘な

りしなるべし。

下
弱よわきほどこに施ほすに能のういむい以無畏

コレ吉兵衛きちべえ、御談義流おの御説諭をおれに聞かせるでもなかろう、御氣の毒だが道理と命と二つならべてぶんなげしちの七様、昔は密まおと男こ拐かどわか帯かしも仕してのけたが、穩おとなしく当あなつて姪めいっこ子こを売るのではない養女めかけだか妾めかけだか知らぬが百両で縁きつを切きて呉くれるという人に遣やる計ばかりの事、それをお辰たつが間夫まぶでもあるか、小間こま癩しやくれて先の知れぬ所ゆくへ行いは否いやだと吼ほえ顔づらかいて逃にげでも仕しそうな様子だから、買手の所ちよつとへ行いく間ちよつと一寸縛おつて置いたのだ、珠しゆうん運んとかいう二才野郎

がどういふ続きで何の故障こしょう。七しち、七しち、静しずかにしる、一体貴様が分
 らぬわ、貴様の姪めいだが貴様と違つて宿しゆくじゆう中ちゆうでの誉ほまれもの者としご、妙
 齡ろになつても白粉おしろい一トつ付つけず、盆正月にもあらゝ木の下駄げた一
 足新規に買おうでもないあのお辰、叔父なればとて常不斷能よくも貴
 様の無理を忍んで居る事ぞと見る人は皆、齒はぎしり切を貴様に噛かんで
 涙をお辰こぼに飜しゆうとすは、姑こおりめしに凍飯こおりめし食くわするような冷ひやい心こころの嫁よめも、
 お辰きいの話聞きいては急つのに角つのを折おつてやさしく夜長の御慰ごゐみに玉子湯たまごゆで
 もして上あげましようかと老としより人の機嫌きげんを取とる気きになるぞ、それを先せ
 度んども上田ぜげんの女衞ぜげんに渡わたそうとした人非にんびにん人にんめ、百両ひゃくりやうの金かねが何なにで要い
 か知らぬがあれ程やさしいの悌やさしい順しん女によを金かねに易かえらるゝ者ものと思おもうて居いる貴様
 の心こころがさあましい、珠運たまごゆといふ御客ごきゃく様の仁情にじやうが半な分ぶん汲くめたならそん

な事云いわずに有あり難がた涙なみだに咽むせびそうな者。オイ、亀屋かめやの旦那だんな、おれとお吉きちと婚礼けいれの媒な妁こうど役やくして呉くれたを恩おんに着きせるか知らぬが貴様きさま々々よしは廢よて下くだされ、七しち七しち四し九くが六む十じゅうになつてもあなたごやっの御ご厄かい介かいになろうとは申もうしませぬ、お辰あつしは私の姪めしり、あなたあがの娘むすめではなしき、きりく、此ここ処こゝへ御おだし出だなされ、七しちが眼め尻じりが上あがらぬうち温すな直なおになされた方が御おため為ためかと存ぞんじます、それともあなたは珠たま運うんとかいう奴やつに頼たのまれて口くちをきく計ばかりじや、おれは当あた人ひとじや無なければ取と計けいいかねると仰おつしやるならば其そのおとこ男おとこに逢あいましよ。オ、其その男おとこ御ご眼がんにかゝろうと珠たま運うん立たち出いで、つく／＼見みれば鼻はな筋すぢ通とりて眼めつきり、しく、腮あぎと張はりて一ひと卜たしか確かにある悪しれもの物もの、膝ひざすり寄よせて肩かた怒いからし、珠たま運うんとか云いう小こ二に才さいはおのれなまだな生なま弱よ々くしい顔かほをして能よくもお辰あつしを拐かど帶わし

た、若いには似ぬ感心な腕うで、併しかし若いのに、鬪しやも鶏の前では地じどり鶏はひ
 るむわ、身の分限しつを知らぬなら尻尾しりおをさげて四の五のなしにお辰を
 渡して降参しろしろ。四の五のなしとは結構おおな仰せ、私も手短てく申し
 ましようならお辰様うらを売うらせたくなければ御相談ねごと。ふざけた囃ねごと語は
 置おいてくれ。コレ七、静しずかに聞きけ、どうか売うららずと済すむ工夫くわふをと云いう
 をも待まちたず。全体こしやく小癩たびな旅がらす鳥とと振ふりあぐる拳こぶし。アレと走り
 出いるお辰、吉兵衛きちべいも共に止とめながら、七蔵しちざう、七蔵しちざう、さてもそなたは
 智ちえ慧えの無い男、無理無理に売うらずとも相談さうだんのつきそうな者を。フ相談さうだん付つか
 ぬは知しれた事、百両ひゃくりょう出いすなら呉くれれてもやろうがとお辰とらを捉とらえ立たちあ
 上がる裙すそを抑おさえ、吉兵衛きちべいの云いう事ことをまあ下に居いてよく聞きけ、人ひとの
 身みを売うら買かいするといいうは今こん日にちの理りに外はずれた事、娼じやう妓ぎにするか

妾に出すか知らぬが。エ、喧擾やかましいわ、老耄おいぼれ、何にして食おう
 がおれの勝手、殊更内金二十両まで取つて使つて仕舞しまつた、変へんが
 改いはとても出来ぬ大きに御世話、御茶でもあがれとあくまで罵ののし
 り小兎攫こうさぎつかむ驚わしの眼まなざし恐ろしく、亀屋の亭主も是これまでと口を噤つぶ
 むありさま珠運くちおし口惜もろく、見ればお辰はよりどころなき朝顔あらしの嵐
 に逢あいて露脆こなたく、此方こなたに向いて言葉はなく深く礼して叔父つきそに付
 添いたちいず立あし出る二タ足三足め、又後うしろふり向きし其そのあわれさ、八幡命はちまん
 かけて堪忍よびとならずと珠運七と呼留め、百両物の見事に投出して、
 亭主おどろくお辰かまの驚にも関てつづわらず、手続つづ油断なく此この悪人と善女ぜんによの縁を
 切りてめでたしく、まずは亀屋の養女分となしぬ。

第六

如_{によ}是_ぜ縁_{えん}上
種_た子_ね一_{いち}粒_{りゆう}が雨_う露_ろに養_やわ_る

自分_め 妾_{かけ} 狂_{ぐる}い 狂_いしながら息_む子_すの傾_{けい}城_{せい}買_{がい}を責_せむ_む人心_{じんしん}、あさましき
 中_{ちゆう}にも道_{だう}理_りありて、七_{しち}の所_{じよ}業_{ぎよ}誰_{たれ}憎_{にく}まぬ者_{もの}なければ、酒_{しゆ}吞_{のん}で居_ゐても
 彼_き奴_{やつ}娘_{むすめ}の血_ちを吮_すうて居_ゐるわと蔭_{かげ}言_ごと、流_{りゆう}石_{せき}の奸_{かん}物_{ぶつ}も此_こ処_こ面_{めん}
 白_{しろ}からず、荒_あ屋_ば一_{いつ}トつ遺_{のこ}して米_{こめ}塩_{しお}買_{かい}懸_かりの云_い訳_{わけ}を家_{いえ}主_{ぬし}

亀屋かめやに迷惑ごまかしがらせ何処どこともなく去りける。珠運しゅうんも思い掛がけなく色
 々の始末はつまつに七日余り逗とまり留りゆうして、馴染なじむにつけ亭主ていしゅ頼たのもしく、
 お辰たつかわゆ可愛かわいく、囲炉裏いろりの傍はたに極楽国ごくらくこく、迦陵頻伽かりようびんがの笑わらいごこむつま声こゑ睦むつじけ
 れば客きやくあしらいされざるも却かえつて気楽かえつに、鯛たいは無なくとも玉味噌たまみその豆腐とうふ
 汁じゆ、心協あこう同志どうし安らかに団坐まどいして食うまう甘あまさ、或あるいは山茶やまちやも一時いつとき
 の出花でばなに、長ながき夜の徒つれづれ然ぜんを慰なぐさめて囲ぐるい栗くりの、皮剥むいてやる一いつ顆かの
 なさけ、嬉うれしげ氣げに賞しょう翫がんしながら彼かも剥むきたるを我われに呉くるゝお
 かしさ。実げに山里さんりも人情あたたかの暖あたたかさありてこそ住すめば都みやこに劣せうらざれ。さ
 りながら指折さしおり数かずうれば最早もはや幾日いくにちか過すぎぬ、奈良ならという事こと臆おそい起たち
 ては空むなしく遊あそび居おるべきにあらざとある日ひ支度しど整ととのえ勘定かんと促うながし立たち
 出でんというに亭主ていしゅ呆あきれて、是これは是これは、婚よめ礼れいも済すまぬに。ハテ誰たれ

が婚礼。知れた事お辰が。誰と。冗談は置玉え。おきたまあなたならで
 誰と、云れてカツと赤面し、乾きたる舌早く、御亭主こそ冗談は
 置玉え、私約束したる覚なし。おぼえイヤ怪しからぬ野暮を云るゝは
 都の御方にも似ぬ、今時の若者わかものがそれではならぬ、さりとして
 は百両投出なげだして七蔵にグツとも云わせなかつた捌き方と違つてお
 ぼこな事、それは誰しも耻はずかしければ其様そのようにまぎらす者なれど、
 何も紛まぎらすにも及ばず、爺じじが身に覚あつてチャンと心得てあなたの
 思おもわく凶星の外れぬ様致せばおとなしく御待おまちなされと何やら独ひとり
 呑のみ込こみの様子、合点がてんならねば、是これ是これ御亭主、勘違まちがい致さるゝ
 な、お辰様をいとしいところ思おもいたれ女房しやうに為様しやうなぞとは一厘いちりん
 も思おもわず、忍しのびかねて難義たすけを助たすけたる計はかりの事、旅たびの者に女房授おづけら

れては甚だ迷惑はなは。ハハハ、ア、何の迷惑、器量美しく学問おんぎよ音ね
 曲くのたしなみ無なくとも縫ぬい針暗はりからず、女の道自然わきまと弁わえておと
 なしく、殿御とのごを大事にする事請うけあい合のお辰を迷惑とは、両ふたはしら柱しら
 の御神以来ず凶まことない議論、それは表面うわべ、真まことを云えば御前の所しよぎよう行
 も曰いわくあつてと察したは年の功、チヨン鬻まげを付つけて居ても粹すいじや、
 実まことはおれもお前のお辰ほれに惚ほれたも善よく惚ほれた、お辰が御前に惚ほれたも善
 く惚ほれたと当世の惚ほれ様ようの上手つもりなに感心して居るから、媼おばとも相談
 して支度出来次第婚礼さする積つもりじや、コレ珠運年寄の云う事と牛
 の鞅しりがい外れつれだつそうで外れぬ者じや、お辰を女房にもつてから奈良へで
 も京へでも連つれだつ立たつて行きやれ、おれも昔は脇わき差さしに好このみをして、媼
 も鏡を懐中してあるいた頃ころ、一世代の贅ぜいたく沢ざいに義仲寺ぎちゆうじをかけ

て六条様参り一いっしょ所にしたが、旅ほど鼻かかが可愛かわゆうておもしろい事
 はないぞ、いまだに其その頃を夢に見て後での話しに、此間このも嫗ばばに
 真夜中頃まごころ入齒を飛出さして笑つたぞ、コレ珠運、オイ是は仕したり、
 孫でも無かつたにと罪のなき笑い顔して奇麗なる天窓あたまつるりとな
 でし。

中 実み生しょう二葉ふたばは土塊つちくれを抽ぬく

我今まで恋と云いう事し為おぼえたる覚おぼえなし。勢せい州しゅう 四日市にて見たる
 美人三日眼前めさきにちらつきたるが其それは額ほくろに黒痣ありてその位置ところに白び
 毫やくごうを付つけなばと考えしなり。東京天王寺てんのうじにて菊の花片手に墓

参りせし艶女えんじよ、一週間思い詰つめしが是これも其指つきを吉祥菓持きつしようかもたせ
 玉たまう鬼き子母神しぼじんに写してはと工夫せしなり。お辰たつを愛めでしは修業の足
 しにとにはあらざれど、之これを妻めかけに妾いろ婦にになどせんと思おもいしに
 はあらず、強しいて云いわば唯何ただとなく愛めでいきし勢おいに乗りて百両あたえは与あたえ
 み、潔白わがの我わが心中はかを付はかる事出来ぬ爺じいめが要いらざる粹すいで立馬だて鹿々々ばかし、
 一生しゆうじんに一つ珠しゆうじん運うんが作意の新仏体を刻まんとする程のぞみの願望ある身
 の、何として今から妻など持もつべき、殊もつにお辰お辰は叔父おじささえなくば大だ
いじん 尽いじんにも望まれて有ゆう福ふくに世を送るべし、人は人、我は我の思おもわ
 くありと決けつ定じようし、置手紙にお辰宛あて少すこ許しばかりの恩かを伽おんに御身み
めと を娶めとらんなどする賤いやしき心は露持たぬ由したたを認め、跡は野となれ山
 路にかゝりてテクあるきく歩あるき行あるき。さても変物この、此男木作りかそしと譏そしる者

は肉にく団だん奴才どさい、御釈迦おしやか様が女房によう捨てすてて山やま籠ごもりせられしは、耆婆きばも
 ヒさしを投なげた癩らい病びよう、接吻くちづけの唇くちびるポロリと落おちしに愛想あいそ尽つしてならん
 など疑やう儕輩やからなるべし、あゝら尊うやし、尊うやし、銀ねの猫ね捨すてた所ところが西さい
 行ようなりと喜よろこんで誉ほむる輩ともがら是これも却かえつて雪ゆきのふる日の寒さむいのに氣きが付つ
 ぬ詮せん義ぎならん。人間元にんげんより変かな者もの、目め盲めいてから其その昔むかし拝あやんだ旭日あさひの
 美うしきを悟さとり、巴里パリに住すんでから沢庵たくあんの味あじを知るよし。珠運しゆんは
 立たつ鳥とりの跡あとふりむかず、一里いちりあるいた頃ころ不ふ思しい出でし、二里にりある
 いた頃ころ珠運しゆん様さまと呼よぶ声こゑ、まさしく其そのひとうしろと後あと見みれば何なにもなし、三
 里さんりあるいた頃ころ、もしえと袂たもと取とる様子ようす、慥たしかにお辰あつちと見みれば又また人も居お
 らず、四里しりあるき、五里ごり六里ろくり行き、段々だんだん遠とほくなるに連つれて迷まよう事こと
 多く、遂つひには其その顔かほ見みたくなりて寧いっそ歸かへろうかと一ひト足あし後あとへ、ドツコ

イと一二町進む内、むか〜と其声聞度て身体の向を思わずく
 るりと易る途端道傍の石地藏を見て奈良よく誤つたりと一町
 たらざるく向より来る夫婦連の、何事か面白相に語らい行くに
 我もお辰と会話仕度なつて心なく一間許り戻りしを、愚なりと
 悟つて半町歩めば我しらず迷に三間もどり、十足あるけば四足戻
 りて、果は片足進みて片足戻る程のおかしさ、自分ながら訳も分
 らず、名物栗の強飯売家の牀几に腰打掛けてまず〜と案じ
 始めけるが、箒木は山の中にも胸の中にも、有無分明に定ま
 らず、此処言文一致家に頼みたし。

下 若木三寸で螻蟻に害う

世の中に病やまいちよう者なかりせば男心のやさしかるまじ。髭ひげ先さき

のはねあがりたる当世才子、高慢の鼻をつまみ眼鏡めがねゆゝしく、父

母干渉の弊害を説ときまくりて御異見の口に封蠟ふうろう付つけた玉たまいしを一日

粗造のブランデーに腸加答カタル見起して閉口頓とん首しゆの折柄、昔風の思

い付、氣に入らぬか知らぬが片栗湯かたくりゆこしらえた、食たべて見る氣は

ないかと厚かいき介ほう抱有難く、へこたれたる腹にお母ふくろの愛情を吞のんで

知り、是これより三十銭の安西洋料理食う時もケーク丈だけは。ポツケツト

に入れて土産みやげとなす様になる者ぞ、ゆめく、美妙なる天の配剤に

不足い云いうべからずと或ある人ひと仰せられしは尤もつなりけり。珠しゆ運うん馬籠まごめ

に寒あたりして熱となり旅路の心細く二日計ばかり苦む所へ吉兵衛と

お辰尋ね来り様々の骨折り、病のよき汐を見計らいて駕籠安泰に
 亀屋へ引取り、夜の間も寐ずに美人の看病、藪医者の薬も瑠璃光
 薬師より尊き善女の手にしたせ玉える茶碗にて吞まざるれば
 何利ざるべき、追々快方に赴き、初めてお辰は我身の為にあら
 ゆる神々に色々の禁物までして平癒せしめ玉えと禱りし事まで
 知りて涙湧く程嬉しく、一ト月あまりに衰こそしたれ、床を離れ
 て其祝義濟みし後、珠運思切つてお辰の手を取り一間の中に
 入り何事をか長らく語らいけん、出る時女の耳の根紅かりし。其
 翌日男真面目に媒妁を頼めば吉兵衛笑つて牛の鞆と老人の云
 う事どうじやくくと云さして、元より其支度大方は出来たり、善
 は急いで今宵にすべし、不思議の因縁でおれの養女分にして嫁入

すればおれも一トつの善い^よ功德をする事ぞとホク／＼喜び、^{たちま}忽ち
 下女下男に、ソレ膳^{ぜん}を出せ腕^{わん}を出せ、アノ銚子^{ちようし}を出せ、なんだ
 貴様^{ちよう}は蝶^{ちよう}の折り様^{よう}を知らぬかと甥子^{おいご}まで叱^{しか}り飛^{とば}して騒^{さわ}ぐは田舎^か気
 質^{たぎ}の義に進む所なり、かゝる中へ一人の男来^{きた}りてお辰様にと手紙
 を渡すを見ると齊^{ひとし}くお辰あわただしく其男^{つれだち}に連立^{ちよつと}て一寸^{いで}と出し
 が其まゝもどらず、晩方になりて時刻も来^{きた}るに吉兵衛^{いらつ}焦躁^{せうそう}て八方
 を駈^{かけめく}廻^{めぐ}り探索すれば同業^{かた}の方に止^{とま}り居^ゐし若^{わか}き男と共に立去^たりし
 よし。牛^{うし}の鞆^{たがひ}爰^{こゝ}に外^とれてモウともギユウとも云^いうべき言葉なく、
 何と珠運^{しゆん}に云い訳せん、さりとして猥褻^{みだら}なる行^{おこな}いはお辰に限りて無^なか
 し者^{もの}をと蜘蛛^{くも}手に思^{おも}ひ屈^まする時、先程^{さき}の男来^{きた}りて再^{また}渡^{わた}す包^つみもの
 開^{ひら}き見れば、一筆啓上^{つかまうぬいま}仕候^{ぎよ}未^まだ御意^{ごい}を得^えず候^{そうち}え共^{とも}お辰様身^みの上に

つき御厚情こうせい相掛あいかけられし事承り及びあり難くぞんじたてまつりそうろう奉存ほうぞん候こう

さて今日貴殿御計おんはからいにてお辰婚姻取結ばせられ候由おどろきいりも驚入おどろきいりも

申候仔細しさいこれ之あり御辰様儀婚姻には私方かた故障御座候故従来の御礼

旁罷り出かきかたて相止申あいとめもうすべくとも存候ぞんいえ共如何どもいかにも場合切迫致し居お

り且はお辰様心底かによりては私一存にも参り難候がたくよう様の義に至り候

ては迷惑つほなほに付甚だ唐突不敬なれども実はお辰様を賺すかし申し此婚姻この

相延あいのべ申候よう決行致し候尚なおまた又近日参上つかまつ仕り入り込こみたる御話し委

細申もうしあぐ上もべく心得こころえに候え共差当り先日七歳どもに渡され候金百円及

び御礼の印までに金百円進上あいだしおき候間御受納下され度候たく不悉ふしつ

亀屋吉兵衛様へ岩沼子爵家けらい従田原栄作たはらえいさくとありて末書に珠運様と

やらにも此旨御鶴声このむね相伝かくせいられたく候と筆を止めとどたるに加

えて二百円何だ紙なり。

第七
如是報によぜほう

我わがは飛とび来きぬ他たけ化じ自ざい在天てん宮ぐうに

オ、お辰たつかと抱かかき付かれたる御お方かた、見みれば髯ひげうるわしく面おも清てく
衣い裳しょう立た派はいなる人ひと。ハテ何ど処こにてか会あいたる様ようなど思おもいながら身み
を縮ちぢまして恐おそるおそる々々 振ふり仰あぐ顔かほに落おち来くる其その人ひとの涙なみだの熱あつさ、骨ほねに徹とお
して、ア、五日ごにち前まへ一いつ生せいの晴はの化け粧ずいと鏡かがみに向むかうた折ひ会あうたる我わがに少すこ

しも違さわらず扱さは父とと様さまかと早く悟りてすぎる少女おとめの利発りさ、是これに
 も室むろ香かが名残なせの風情ふせい忍いばれて心強こき子爵しも、二十年のむかし、御ご
 機嫌きげんよろしゆうと言葉ことば後力じりなく送しられし時、跡あとふりむきて今いま一ひとこ
とかわ言交ことしたかりしを邪見よこしまに唇くちびる嚙かみ切きて女々めめしからぬ風ふう誰たが為ためにか粧よそお
 い、急いそがでもよき足あしわぎと早はやめながら、後見うしろられぬ眼めを恨うらみし別
かれ離わかの様ようまで胸むねに浮うかびて切せつなく、娘むすめ、ゆるしてくれ、今いままでそなた
 に苦勞くるわうさせたは我わが誤あやり、もう是こゝからは花はなも売うせぬ、檻つづ樓れも着きせぬ、
 荒あき風かぜを其その身からだ体たにもあてさせぬ、定めしおれの所業しわざをば不審ふしんもし
 て居ゐたろうがまあ聞きけ、手前てまへの母ははに別わかれてから二三日の間実まことは張は
つめり詰つた心こゝろも恋こゝろには緩ゆるんで、夜深よふかに一人月ひとりづきを詠ながめては人ひとしらぬ露せ窄ま
そでき袖そでにあまる陣頭さびの淋さびしさ、又は総軍そうぐんの鹿島かしま立たちに馬蹄ばていの音ね高たかく

朝霧を蹴けつて勇ましく進むにも刀の鎧こじけ引かるゝように心たゆたい
 しが、一封の手簡てがみ書く間もなきいそがしき中、次第うとに去る者の疎
 くなりしも情じょうあい合の薄うすいからではなし、軍事の烈はげしさ江戸に乗
 り込んで足溜あしだまりもせず、奥州おうしゅうまで直押ひたおしに推す程いきおいの勢、自
 然と焰えんしょう硝の煙なれに馴なては白粉おしろいの薫かおり思い出いださず喇叭らつぱの響こに夢
 を破やぶれば吾妹子わぎもこが寝ねくれた髪かみの婀娜あだめくも眼前めさきにちらつく暇いとまなく、
 恋も命も共に忘れて敗軍の無念むねんには励はげみ、凱歌かちどきの鋭気えいには乗のじ、
 明あけても暮くれても肘ひじを擦さすり肝きもを焦やがし、饑うえては敵あの肉くに食くらひ、渴かわして
 は敵の血を飲のまんとするまで修羅しゆらの巷ちまたに阿修羅あしゆらとなつて働はたらけば、
 功名ひ一ひつあられわれ二ふたつあられわれ総督おんおほの御覚おんおぼえめでたく追おひ
 々の出世い、一方の指揮いとなれば其任愈重いよいよく、必死いに勤めけるが

しあわせ
 仕合に弾丸をも受けず皆々凱陣の暁、其方器量学問見所あり、何某大使に従つて外国に行き何々の制度能々取調べ帰朝せば重く挙用らるべしとの事、室香に約束は違えど大丈夫青雲の志此時伸べしと殊に血気の雀躍して喜び、米国より欧州に前後七年の長逗留、ア、今頃は如何して居おるか、生れた子は女か、男か、知らぬ顔に、知られぬ顔、早く頬摺して膝の上に乗せ取り、護謨人形空気鉄砲珍らしき手玩具数々の家苞に遣つて、喜ぶ様子見たき者と足をつま立て三階四階の高楼より日本の方角徒らに眺しも度々なりしが、岩沼卿と呼せらるる尊き御身分の御方、是も御用にて欧州に御滞在中、数ならぬ我を見たとて御子なき家の跡目に坐れとのあり難き仰せ、再三辞みたれど

許されねばいなみね辞兼て承知し、共々嬉しくうれ歸朝して我は輕からぬ役を
 拜命する計か、終に姓を冒して人に尊まるゝに付てもそなたが母
 の室香が情何忘るべき、家来に吩咐いひつけ附て段々ただ糺せば、果敢なや我
 と樂は分けで、彼岸の人と聞くつらさ、何年の苦勞一トつは国
 の為なれど、一トつは色紙のあたつた小袖着て、塗の剥た大小さ
 した見所もなき我を思い込んで女の捨難すてがたき外見を捨て、譏そしりを関
 わず危あやうきを厭いとわず、世を忍ぶ身を隠かくまい匿く呉れたる志、七生忘れら
 れず、官軍に馳参はせさんせんと、決心した我すら曇り声に云い出せし時
 も、愛情の涙は臉まぶたに溢あふれながら義理の詞正しく、予ての御本望わたくし妾
 めまで嬉うれしう存じますと、無理な笑顔えがおも道理なれ明日知らぬ命の男
 それを尚なおも大事にして余りに御髪おぐしのと髻ひげ月さか代人手にさせず、後うしろ

に廻りてまわ元結もとゆいもしめちから力なき悲しさを奥歯かに噛んできり／＼と見苦しからず結むすうて呉くれたる計はかりか、おのが頭かしらにさしたる金きん簪かんざしまで引抜きぬく温ぬくみを添そえて売うつてのみ、我身のまわり調度たまたにして玉たまわりし大事だいじの／＼女房にようぼうに満足まんじつさせて、昔むかしの憂うきを楽たのしみに語りたさの為ためなりしに、情なさけ無なくも死しなれては、花はな園そのに牡丹ぼたん広う々と麗うるわしき眺望ながめも、細口ほめの花はな瓶びんに唯ただ二三輪にさんりんの菊きく古流こりゅうしおらしく彼いが生いたるを賞ほめ、賞ほめられて二人ふたりの微笑ほほえみ四畳半よじやうはんに籠こもりし時程ときほどは、今いまつくねんと影法かげぼう師し相手あひまに独ひとり見る事ことの面白おもしろからず、榮華えいげを誰たれと共に、世よも是こゝろ迄までと思おもひ切きつて後のち妻さいを貰もらいもせず、さるにても其子こ何処どこぞと種々さまざま尋たずねたれど漸ようやくそなたを里さとに取りたる事ことある嫗ばばより、信濃しなのの方かたへ行いかれたという噂うわさなりしと聞き出いしたる計はかり、其筋すぢの人ひとに頼たのんで

も何故なにゆえか分らず、我外わねほかに子なければ年とし老る丈だいけ愈い恋いしく信州
 にのみ三人も家けらい従をやつて搜さがさせたるに、辛からくも田原が探いし出だし
 て七しち蔵ぞうという悪者よりそなた貫もらい受うけんとしたるに、如何どういう
 訳か邪魔いり入いりて間もなくそなたは珠しゆう運うんとか云つま詰まらぬ男に、身を
 救きうわれたる義理ぎりづくやら亀屋かめやの亭主の压制やら、急に婚こん礼れいすると
 いうに、一い旦つたん歸京かえつて二度目にまた丁ちよう度ど行つき着きたる田原が聞きて
 狼ろう狽ばいし、吾書わが捨かきすて室香むろかに紀念かたみと遺のこせし歌、多分たぶんそなたが知しつ
 居いるならんと手紙てがみの末すえに書かき頓智とんちに釣つり出いだし、それから無理むりに訳
 も聞きかせず此こ処こまで連つれて来きたなれば定めし驚おどいたでもあろうが少
 しも恐おそるゝ事ことはなし、亀屋かめやの方は又々田原をやつて始末しまつする程ほどに
 是こゝからは岩沼子爵いわたぬまの立派りつぱな娘、行儀ぎよぎ学問がくもんも追々お覺あえさして天晴あつぱれ

の婿取り、初孫の顔でも見たら夢の中にそなたの母に逢つても
 云、訳があると今からもう嬉くてならぬ、それにしても髪とりあ
 げさせ、衣裳着かゆさすれば、先刻内々戸の透から見たとは違
 つて、是程までに美しいそなたを、今まで木綿布子着せて置た親
 の耻しさ、小間物屋も呼せたれば追付来であろう、櫛簪何なり
 と好きなを取れ、着物も越後屋に望次第云付さずするから遠慮な
 くお霜を使え、あれはそなたの腰元だから先刻の様に丁寧に辞
 義なんぞせずとよい、芝屋や名所も追々に見せましょ。舞踏会
 や音楽会へも少し都風が分つて来たら連て行ましょ。書物は
 読るかえ、消息往来庭訓までは習つたか、ア、嬉しいぞ好々、
 学問も良い師匠を付てさせようと、慈愛は尽ぬ長物語り、扱こそ

珠運が望み通り、この此女菩薩果報めでたくなり玉いしが、さりとては結構づくめ、是は何とした者。

第八

如是によぜりき力上 楞嚴呪文りようごんじゆもんの功も見えぬ愛慾あいよく

古風こふう作者さくしやの書かきそうな話し、味噌みそ越提こしげて買物あるきせしあのお辰たつが雲の上うえびと人岩いわぬまし沼子ししやくさま爵様の愛まなむすめ娘きいと聞て吉兵衛仰天し、
 扱さてこそ神も仏も御座る世じや、因果てきめん覲面めん地ぢならしのよい所に蘿だ
 蔔いこは太りて、身持みもちのよい者に運うの実みがなる程理かなつに叶なつた幸福と無上

に有難がり嬉しがり、一も二もなく田原の云事承知して、おの
 が勧めて婚姻さし懸たは忘れたように何とも云わず物思わしげな
 る珠運の腹聞ずとも知れてると万端埒明け、貧女を令嬢といわ
 るゝように取計いたる後、先日つきもとの百両突戻して、吾当世の
 道理は知ねど此様な氣に入らぬ金受取る事大嫌なり、珠運
 様への百両は慥に返したれど其人に礼もせぬ子爵から此親爺が
 大枚の礼貫は煎豆をまばらの齒で喰えと云わるゝより有難迷
 惑、御返し申ますと率直に云えば、否それは悪い合点、一酷に
 そう云われずと子爵からの御志、是非御取置下され、珠運様に
 は別に御礼を申ますが姿の見えぬは御立なされたか、十二奥の坐
 敷に。左様なら一寸と革囊さげて行かゝれば亭主案内するを

堅く無用と止めながら御免なされと唐襖開きて初対面の挨拶
あいさつ
 了りお辰素性のあらまし岩沼子爵の昔今を語り、先頃よりの礼
さきごろ
 厚く演のべて子爵より礼の餽り物数々、金子二百円、代筆ならぬ謝状、
 お辰が手紙を置列べてひたすら低頭平身すれば珠運少しむつと
おきなら
 なり、文丈ふみだケ受取りて其他には手も付つけず、先日の百両まで其処そこに
 投出し顔しかめて。御持おも帰ちかえり下さい、面白からぬ御所置、珠運
ため
 の為した事を利を取ろう為の商法と思われてか片腹痛し、些ちとばかり許ゆる
 の尽力したるも岩沼令嬢の為にはあらず、お辰いとしと思つてば
それ
 かりの事、夫より段々馴染なしみにつけ、縁あればこそ力にもなりなら
たがい
 れて互うれしくに嬉うれしく敷心底打明け荷物の多きさえ厭いとう旅路の空に婚禮ま
だしぬけ
 でて女房に持とうという間際になりて突ひきさら然ひきさらに引攫ひきさらい人の恋

を夢にして貌ばくに食くわせよという様な情なきなされ方、是はまあどう
 した訳と二三日は氣きぬ抜する程恨めしくは存じたれど、只ただいま今承れ
 ば御親子の間柄、大切の娘御を私風情の賤いやしき者に嫁よめいら入してはと
 御家従ごけらいのあなたが御心配なすツて連つれて行ゆかれたも御道理、決して私
 めが僭せんじょう上じょうに岩沼子爵の御令嬢をどうのこうのとは申もうしませぬか
 ら、金円品物は吃きつ度御持帰り下され、併しかしまざくと夫婦約束ま
 でしたあの花漬はなづけ売うりは、心さえ変らねばどうしても女房に持つ覚
 悟、十二月に御嶽おんたけの雪は消ゆる事もあれ此このおもい念ねんは消きえじ、ア、
 否いやなのは岩沼令嬢、恋しいは花漬はなづけ売うりと果はては取とり乱みだして男おとこの述じゆつか
 懐い。爰ここで肝要、御主人の仰うけせ受て来た所なり。よしや此恋諏訪すわ
 の湖うみの氷より堅くとも春風のぼやくと説きやわらげ、凝りたる

思おもひを水に流さし、後々の故障なき様にせではと田原は笑顔えがおあやし
 く作り上うわくちびるしなめ唇屢嘗ながら、それは一々至極の御道理、さりとして
 人間を二つにする事も出来ず、お辰様が再度また花漬売にならるゝ瀬
 も無なるべければ、詰りあなたが無理な御望おのぞみと云者いうもの、あなたも
 否いやなのは岩沼令嬢と仰せられて見ると、まさか推して子爵の婿に
 ならうとの思おぼしめし召おぼしめしでも御座るまいが、夫婦約束までなさつたと
 て婚礼の済すたるでもなし、お辰様も今の所ではあなたを恋しがつ
 て居らるゝ様子なれど、思想の発達せぬ生なま若なまい者の感情、追付おつつけ
 變つて来るには相違ないと殿様の仰せ、行末は似つかわしい御縁
 を求めて何れいずかの貴族の若公わかぎみを納いれらるゝ御積り、是これも人の親の
 心になつて御考おかんがえなされて見たら無理では無いと利発のあなた

にはよく御了解で御座りましょう、箇様申せばあなたとお辰様の
あいなか情交を割く様にも聞えましようが、花漬売としてこそあなたも
 約束をなされたれ、詰る所成就覚束なき因縁、男らしゅう思い
 切られたが双方の御為かと存じます、併しお辰様には大恩ある
 あなたを子爵も何でおろそかに思われましよう、されば是等の餽
くりもの物親御からなさるゝは至当の事、受取らぬと仰つたとて此
 儘にはならず、どうか条理の立様御分別なされて、枉ても枉
 ても、御受納と舌小賢しく云述に東京へ帰つたやら、其後音沙
さた汰なし。さても浮世や、猛き虎も樹の上の猿には侮られて位置の
 懸隔を恨むらん、吾肩書に官爵あらば、あの田原の額に畳の跡深
 々と付さし、恐惶謹言させて子爵には一目置た挨拶させ

差詰さしづめ智む殿このと大切がられべきを、四民同等の今日とて地下じげと雲う

上んじよう

の等差ちがい口惜し、珠運やすを易く見積つて何百円にもあれ何万円

にもあれ札さつで唇にかすがい膏こううつ打うような処置、遺恨千万、さりな

がら正四位しょうしい何の某なにがしとあつて仏師彫刻師を智むこには為たがらぬも無

理ならぬ人情、是非もなけれど抑そもそも々々仏師は光こうこう孝天皇是忠これただの

親王等の系いに出いでて定じようちよう朝初ちようめて綱位こういを受け、中なかなか々々賤やしまるべき

者しやにあらず、西洋にては声なき詩の色あるを絵と云い、景なき絵

の魂凝こりしを彫像と云う程尊たつとむ技なを為われす吾われ、ミチエルアンジロにも

やはか劣るべき、仮令たとい令嬢の夫たるとも何の不都合あるべきとは

云え、蝸牛でむしの角つの立たてて何の益なし、残念や無念やと癩かんしやく癩くの

牙きばは齧かめども食くい付つく所なければ、尚なお一段の憤ふんもん悶もんを増して、果はては

腑甲斐なき此身惜からずエ、木曾川の逆巻水に命を洗つてお辰
見ざりし前に生れかわりたしと血相變る夜半もありし。

下
化城諭品の諫も聴ぬ 執着

瘦たりやく、病氣揚句を恋に責られ、悲に絞られて、此身細
々と心引立ず、浮藻足をからむ泥沼の深水にはまり、又は露
多き苔道をあゆむに山蛭ひいやりと襟に落るなど怪しき夢計
見て覺際胸あしく、日の光さえ此頃は薄うなつたかと疑うま
で天地を我につれなき者の様恨む珠運、旅路にかりそめの長居
最早三月近くなるにも心付ねば、まして奈良へと日課十里の行

脚やどころか家内やうちをあるく勇氣さえなく、昼うたたねがちは転寝勝うたたねがちに時々怪け
 しからぬ囁語うわごとしながら、人の顔見じょうだんては戯談じょうだん一トつ云ひわらず、に
 やりともせず、世ようやは漸ようやく春めきて青空を渡る風長閑のどかに、樹きぎ々の梢こずえ
 雪の衣脱たぎ捨て、家々の垂氷たるひいつの間にか失うせ、軒伝しずくたえまう雫絶間しずくたえまな
 く白い者班まばらに消えて、南みなみむき向むかの藁屋根わらは去年こぞの顔かほを今年初めて
 露あらかせば、霞かすむ眼めの老おいも、やれ懐なつかかしかつたと喜び、水みづは温ぬるみ下草しもくさ
 は萌もえた、鷹たかはまだ出ぬか、雉きじ子はこまどうだと、終ついに若わか鮎あゆの樽うわさに
 まで先走りこまりて若い者こまは駒こまと共に元氣付づきて来る中に、さりとはあ
 るまじき鬱ふさぎ様よう。此跡このががらりと早はや変りして、さてもわごりく和御寮わごり
 は踊ふりる振ふりが見みたいか、踊ふりる振ふりが見みたくば、木曾路かめやに御座おやしれのなど
 狂乱おおようきの大陽おおようき氣なにでも成なられまい者なでもなしと亀屋かめやの爺おやし心配しんぱいし、泣な

くな泣きやるな浮世は車、大八の片輪田かたわの中に踏込んだ様ようにじつ
 として、くよくして居るよりは外あをあるいて見たら又どんな女
 に廻り合めぐあかもしれぬ、目印めぐの柳あうの下で平常魚ふだんは釣つれぬ代り、思い
 よらぬ蛤はまぐりの吸物から真珠まじゆを拾い出すと云う諺ことわざがあるわ、腹はらを広く
 持もて、コレ若いほかの、恋こは他ほかにもある者ものを、と詞ことばおかしく、元はげあた
 頭まの脳漿のうみそから天保度てんぼうどの浮気論主意書うわきろんしゅいがきという所ところを引抽ひきぬき、
 黴かびの生はえた駄洒落だじゃれを熨斗のしに添そえて度々進呈しんせいすれど少しも取り容いれず、
 随分面白おもしろく異見いけんを饒舌しゃべつても、却かえつて珠運たまいきが溜息あいきの合あの手ての如ごと
 くなり、是では行かぬと本調子整々堂々、真面目まじめに理屈りくつしんなり
 諄々くどくどと説諭せつごすれば、不思議ふしぎやさしも温順おとなしき人、何なににじれてか
 大薩摩おおさつまばりばりと語氣ごぎ烈はげしく、要いらざる御心配無用ごしんぱいむようなりうるさ

しと一トまくりにやりつけられ敗走せしが、関かまわらず置おけば当世は時花や
 らぬ恋の病になるは必定、如何どうにかして助けてやりたいが、ハテ
 難物いっそじや、それとも寧きよう、経帷子かたびらで吾家わがやを出しゅつたつ
 ならぬ内追おつぱら 払おうか、さりとは忍び難し、なまじお辰と婚姻
 を勧めなかつたら兎とも角かくも、我わが口くちから事仕出しした上は我わが分ぶん別べつで
 結局つまりを付つけねば吉兵衛も男ならずと工夫したるはめでたき気象きしようぞ
 かし。年としは老とるべきもの流石さすが 古ふる 兵ものの斥候しやくこう虚実きょじつの見所けんじょ誤あやらず畢ひ
 つきよう 竟つぎよう 手に仕業しわざなければこそ余計な心が働くきて苦くるむ者ものなるべしと
 考あえつき、或ある日ひ珠運しゆんに向つて、此日本一果報男ききたまめ、聞き玉たまえ我昨
 夜の夢ゆめに、金きん 襖ふすま 立派りっぺいなる御殿うちの中、眼めもあやなる美うつくしき衣い
 裳う着きたる御姫様床みめいさまどの間に向つて何やらせらるゝ其鬢そのびんつき 付襟つきえりあし 足あし

のしおらしき、後うしろからかぶりついてやりたき程、もう二十年若く
 ば唯ただは置おけぬ品物めと腰は曲つても色に忍び足、そろくといよ
 り椽えんがわ側に片手つきてそつと横顔拜めば、驚おどろいたりお辰、花漬売に
 百倍の奇麗をなして、殊うれい更憂いを含むぐあいすこみ工合凄味あるに総そうけだち毛立なが
 ら尚なおよ能くそこら見廻みまわせば、床に掛かけられたる一軸たれ誰たれあろうおまえの
 姿絵ゆえ故少ねたし妬ねたくなつて一念の無むみようきぎ明萌す途端、椽の下から顕あらわいれ出
 たる八百八はっぴやくやぎつ狐ねつき付添おれて己の踵かかとを覗ねらうから、此こやつ奴たまらぬと逃に
 げげだうしろ、出す後うしろから諏訪すわほつ法性しやうの胃かぶとだか、粟あわ八升も入る紙かんぶくろ袋かぶとだかをス
 ポリと被かぶせられ、方角かぶさらに分わらねば頻しきりと眼玉めがねを澆ばら々ばちしたらば、
 夜具そでの袖そでに首くびを突つ込んで居ゐたりけりさ、今の世かの勝かつ頼よりさま、チ
 卜おおご御ご驕ごりなされ、アハ、と笑ころい転ころげて其その儘まま坐ざ敷しきをすべり出いでし

が、跡は却て弥寂しく、今の話にいとゞ恋しさまさりて、其事そのこと
 かのこと 寂じやくねん 然ぜんと柱に憑もたれながら思ううち、瞼自然とふさぐ時あ
 彼事 寂じやくねん 然ぜんと柱に憑もたれながら思ううち、瞼自然とふさぐ時あ
 りく〜とお辰の姿、やれまてと手を伸のばして裙捉えんとするを、果は
 敢かなや、幻の空に消えて遺のこるは恨許うらげり、爰こゝにせめては其面影現おもかげつ
とどに止めんと思いたち、亀屋の亭主ていしゆに心添そえられたるとは知らみずから
 善よき事考ことえ出いせし様ように吉兵衛に相談すれば、さて無理ならぬ望み、
 閑静なる一間欲ひとまほしとならばお辰住居すまいたる家尚能なおよらん、畳さえ敷け
 ば細工部屋せいせいにして精々せいせい一ト月位住すまうには不足なかるべし、ナニ
 話に来るは謝絶ことわると云わるゝか、それも承知しました、それなら
 ば食事を賄まかうより外に人を通わせぬよう致しますか、然しかし余り牢ろ
 住居うずまいの様ようではないか、ム、勝手とならば仕方がない、新聞丈だけ

は節々^{せつせつあげ}上ましよう、ハテ要らぬとは悪い合点^{がてん}、氣の尽た折^{つき}は是非世間の面白可笑^{おかし}いありさまを見るがよいと、万事親切に世話して、珠運^{たまご}が笑し^{えま}氣に^げ恋人の住し跡^{すみ}に移るを満足せしが、困りしは立像刻む程の大きなる良木^{よき}なく百方索^{さが}したれど見当らねば厚^{ひのき}き檜の大きなる古板^{ふるいた}を与えぬ。

第九 如是果

上 既に仏体を作りて未得安心

胆んを砕くだきて三さん拝はい一いつ鑿さく九く拝はい一いつ刀とう、刻いみ出いせし木き像ざうあり難がたや三十
 勇ゆう猛みょう精しやう進しん潔けつ齋さい怠たいらず、南なん無む歸き命めい頂てい礼らいと真ま心しんを凝こし肝かん
 二そ相う円えん満まんの当とう体たい即そく仏ぶつ、御ご利り益えき疑ぎなしと腥なまきぐおしお尚しやう様さま語ごられし
 が、さりとは浅せんい詮せん索さく、優う鈿でん大だい王おうとか饅う飩どん大だい王おうとやらに頼たの

まれての仕事しわざ、仏師もやり損じては大変と額に汗流れ、眼中に木き
 片きれの飛込とびこむも構わず、恐れ惶かしこみてこそ作りたれ、恭きょう敬けい三さん昧まいの嬉うれし
 き者ならぬは、御本尊様の前の朝ちよう暮ぼの看かん経きんには草くた臥びを啣かこた
 れながら、大だい黒こくの傍そばに下らぬ雑ぞう談だんには夜よの更ふくるをも厭いとい玉たまわ
 ざるにても知るべしと、評へいせしは両親を寺参りさせおき、鬼の留
 守しゅに洗濯する命つかじや、石しゃ罈ぽん玉たま泡ほう沫まつ夢む幻げんの世よに楽せを為なすは損そんと
 帳場の金を攫つかみ出して御お齒は涅くろ溝どぶの水みづと流ながす息子いきこなりしとかや。珠しゆ
 運ゆうんは段々と平ひら面いた板いたに彫ほり浮うかべるお辰たつの像ざう、元もとより誰たれに頼たのまれし
 にもあらねば細工料取らんとにもあらず、唯ただ恋こひしさに余あまりての業わざ、
 一いつ刀と削けずりしばら暫しばくば茫ぼう然ぜんと眼めをく暝ふげば花は漬づけめせとき矯きよう音おんをも洩もら
 す口元の愛らしき工合ぐあい、オ、それくと影かげを促とらえて再また一ひと卜ひ刀かた、一

ト鑿のみ突ないては跡なずさりして眺ながめながら、幾日の恩愛たす扶たけられたり
 扶たけたり、熱に汗蒸れ垢あか臭かき身体からだを嫌いやな様子やなく柔やさしき手して介
 抱くし呉くれたる嬉うれしき今は風前の雲と消えて、思おもは徒いたに都の空に馳はす
 る事悲しく、なまじ最初お辰の難を助けて此この家いえを出でし其その折おり、
とど留とどめられたる袖そで思きい切きて振き払いしならばかくまでの切くるなる苦しみとは
 なるまじき者とと、恋しを恨む恋の愚痴われ、吾われから吾わを弁わえ難まく、
 恍う惚つとする所あへ著わるゝお辰の姿ま、眉ま付ゆ媚つかしく生い々きとして
うつとり
ひとみ
 晴ひ、何じの情じを含こみてか吾わ与がえし櫛くにジツと見とれ居る美うしさ、ア
ここ
 、此こ処こなりと幻まぼろし像まを写まして再ま一ひと鑿ひと、漸まく二十日を越えて最初の
 意匠い誤ごらず、花漬売の時の檻つ樓れをも著きせねば子爵令嬢の錦きんをも着
 せず、梅桃桜菊色々の花は綴なつづりぎぬ衣ひ麗ましく引ひ纏きせたる全身ほ像れ惚れ

た眼からは観音の化身かとも見れば誰に遠慮なく後光輪まで付て、
 天女の如く見事に出来上り、吾ながら満足して眷々とながめ暮
 せしが、其夜の夢に逢瀬平常より嬉しく、胸あり丈ケの口説濃に、
 恋知ざりし珠運を煩惱の深水へ導きし笑窪憎しと云えば、可愛
 がられて喜ぶは浅し、方様に口惜しい程憎まれてこそ誓文移
 り気ならぬ真実を命打込んで御見せ申たけれ。扱は迷惑、一生可
 愛がつて居様と思う男に。アレ嘘、後先揃わぬ御言葉、どうでも
 殿御は口上手と、締りなく睨んで打つ真似にちよいとあぐる、織
 やしや麗な手首緊りと捉て柔に握りながら。打るゝ程憎まれてこそ誓
 いもん 文命掛て移り気ならぬ真実をと早速の鸚鵡返し、流石は可笑し
 くお辰笑いかけて、身を縮め声低く、此手を。離さぬが悪いか。

ハイ。これはくく大きに失礼と其儘離してひぞる真面目顔を、
 心配相に横から覗き込めば見られてすまし難く其眼を邪見に蓋せ
 んとする平手、それを握りて、離さぬが悪いかと男詞、後は
 協音の笑計り残る睦じき中に、娘々と子爵の鑪声。目
 覚れば昨宵明放した窓を掠めて飛ぶ鳥、憎や彼奴が鳴いたのか
 と腹立しさに振向く途端、彫像のお辰夢中の人には遙劣りて身
 を掩う数々の花うるさく、何処の唐草の精霊かと嫌になつた
 る心には悪口も浮み来るに、今は何を着すべしとも思ひ出せず工
 夫錬り練り刀を礪ぎぬ。

下 堅く妄想を捏して自覚妙諦

腕を隠せし花一輪削り二輪削り、自己が意匠の飾を捨て人の天
 真の美を露わさんと勤めたる甲斐ありて、なまじ着せたる花衣脱
 するだけ面白し。終に肩のあたり頸筋のあたり、梅も桜も此君
 の肉付の美しきを蔽いて誇るべき程の美しさあるべきやと截ち
 落とし切り落し、むつちりとして愛らしき乳首、是を隠す菊の花、
 香も無き癖に小癩なりきと刀急しく是も取つて払い、可笑や珠
 運自ら為たる業をお辰の仇が為たる事の様に憎み今刻み出す裸
 体も想像の一塊なるを實在の様に思えば、愈々昨日は愚な
 り玉の上に泥絵具彩りしと何が何やら独り後悔慚愧して、聖書
 の中へ山水天狗楽書したる児童が日曜の朝字消護謨に気をあ

せる如く、周章狼狽 一生懸命刀は手を離れず、手は刀を離さず、
 必死と成て夢我夢中、きらめく刃は金剛石の燈下に転ぶ光きらら／＼
 截切る音は空駈る矢羽の風を剪る如く、一足退つて配合を見
 糺す時は琴の糸断えて余韻のある如く、意糾々気昂々、抑
 も幾年の学びたる力一杯鍛いたる腕一杯の経験修鍊、渦まき起
 つて沸々と、今拳頭に迸り、倦も疲も忘れ果て、心は冴に冴
 渡る不乱不動の精進波羅密、骨をも休めず筋をも緩めず、湧く
 や額に玉の汗、去りも敢さる不退転、耳に世界の音も無、腹に饑
 をも補わず自然と不惜身命の大勇猛には無礙無所畏、切
 屑払う熱き息、吹き掛け吹込む一念の誠を注ぐ眼の光り、凄ま
 じきまで凝り詰むれば、爰に仮相の花衣、幻翳空華解脱し

て深じん入にゆう無む際さい成じよう就じゆ一いつ切さい、し莊しよう嚴ごん端たん麗れいあり難なんき実じつ相さう美み

妙うの風ふう流りゆう仏ぶつ仰おほぎて珠しゆ運うんはよろくと幾いく足そくうしろへ後あと退ずり、

ドツカと坐ざして飛と散さんりし花はなを捻ひねりつ微び笑しょうせるを、寸すん善ぜん尺しゃく魔まの

三さん界がいは猶ゆう如にょ火か宅たくや。珠しゆ運うんさま珠しゆ運うんさまと呼よび声ごえ戸こ口くにせわし。

第十

如是本末究竟等
によぜほんまつくきようとう

上
 迷迷迷、迷は唯識所変ゆえ凡
めいめいめい、まよい ゆいしきしよへん ほん

下碑げじよが是非御来臨おいでなされというに盗まれべき者なき破屋あばらやの氣
 樂たのしみさ、其儘そのまま龜屋かめやへ行けば吉兵衛待兼まちかね顔がおに挨拶して奥の一間へ
 導さだめき、扱珠さてしゆうん運うん様さま、あなたの逗とまり留りゆうも既に長い事、あれ程あり有し
 雪も大抵きさいは消きえて仕舞しまいました、此頃このころの天氣の快よさ、旅路もさのみ

苦しゅうはなし其そのみち道勉強ための為ために諸国行あんぎや脚あしなさるゝ身みで、今の
 時候ときにくすぶりて計ばかり居ゐらるるは損しんという者もの、それもこれも承知
 せぬでは無なろうが若わかい人の癖くせとてあのお辰たつに心こゝろを奪うばわわれ、然しかも取残
 された恨うらみはなく、その木像うぶざうまで刻うむと云いは恋こゝろに親切しんせつで世間よこに疎うとい
 唐もろこし土この天子てんし様が反魂はんこん香こう焼たかれた様ような白痴たわけと悪口あくぐちを叩たたくはおまえ
 の為ためを思おもうから、実まことはお辰あめに逢あわぬ昔あきと諦あきらめめて奈良ならへ修業しゆぎやうに
 行いつて、天あつぱれ晴はれ名人めいじんとなられ、仮かり初そめながら知しり合あとなつた爺じいの耳みみ
 へもあなたあなたの良評判りやうひんぱんを聞きせて貰もらい度たい、然しかし何なにもあなたあなたを追お立た
 る訳わけではないが、昨日けふもチラリト窓まどから覗のぞけば像やうも見事みごとに出来こた
 様子ようす、此上この長ながく此地このちに居ゐられても詰つりあなたあなたの徳とくにもならずと、お
 辰憎ちんぞうくなるに付つてお前まへ可愛かわく、真まことから底そこから正直しやうじきにおまえ、ドツ

コイあなたが行末にも良よい様よう昨夕ゆうべと考かえて見みたが、何どうでも詰じらぬ恋こひを商しょうばい買ばい道具どうぐの一刀いっとうに斬きつて捨すて、横道よこみち入いらずに奈良ならへでも西洋よけいへでも行ゆかれた方が良よいい、婚こん礼れいなぞ勸すすめたは爺おやが一生いっせいの誤ごり、外ぐわいに悪わるい事こと仕した覚おぼえはないが、是これが罪つみになつて地獄じごくの鉄てつ札さつにでも書かれはせぬかと、今朝けさも仏ぶつ様に朝茶あさぢ上ある時とき懺悔ざんげしましたから、爺おやが勸すすめて爺おやが廢やせといふは臍もちざお竿さん握ぎらせて殺せつ生しょうを禁よずる様ような者もので真まに云い憎にくき意見いけんなれど、此こゝを我慢わがまんして謝罪わびがてら正直しんじつにお辰ちんめを思おもい切きれと云いう事こと、今度こんどこそはまちがつた理屈りくつではないが、人間にんげんは活いきもの物もの杓しゃく子し定じよう規ぎの理屈りくつで平押ひらおしには行ゆかず、人情にんじやうとか何なにとか中々ちんぢんむずかしい者ものがあつて、遠とほくも無ない寺てら参まいして御先祖おんせんぞ様のよう墓かみに櫛しきみ一束手たむく向むかる易やすさより孫娘まごぢやうに友禅ゆうぜんをかつかつかつか買かつかつか着きせせる苦くるしい方かえつが却かへ

て仕易しやすいから不思議だ、損徳を算盤そろばんではじき出したら、珠運が
 一身二にいちてんさく一添作せんさくの五も六もなく出しゅつたつ立たつが徳と極ごくるであろうが、
 人情にんじやうの秤目はかりめに懸かけては、魂ふんの分どう銅次第どう、三五さんごが十八にもなりて
 揚げやぎけあげやぎけ ひとちよくひとちよく ドルぼこドルぼこ
 揚屋酒やうやしう 一猪口いちしゆくが弗箱ふちやくより重おもく、色には目なし無二無三むにむさん、身み
んだい 代の釣つり合滅茶苦茶あいちやくちやにする男も世に多いわ、おまえの、イヤ、
 あなたの迷まよも矢張やっぱり人情、そこであなたの合点がてんの行ゆく様、年の功
 という眼鏡めがねをかけてよくく曲くせ者の恋の正体を見届た所を話し
 まして、お辰めを思い切きせましよう。先第一まずに何を可愛かわゆがつて誰たれ
 を慕したうのやら、調べて見ると余程おかしな者、爺かんがえの考では恐らく
 女おほに溺おほれる男も男に眩くらむ女もなし、皆々手製の影法師ほれに惚ほるらし
 い、普通なみなみの人の恋の初幕しよまく、梅花ばいけの匂におふんとしたに振ふりむけ向むけ柳

のとりなり玉の顔、さても美人と感心した所では西さいぎよう行ぎんも凡夫ほんぶ
かわりも変はなけれど、白痴こけは其女の影を自分の晴ひとみの底に仕舞込しまいこんで忘
 れず、それから因縁あれば両三度も落合あいさつい挨拶の一つも云わるゝ
 より影法師殿段々堅くなつて、愛あいきようことば敬けい詞しを執しゆうじやく着ちやくの耳の奥
 で繰り返し玉い、尚なお因縁深ければ戯じようだん談だんのやりとり親切しんせつの受うけさ
ずけ授じゆ男おとこは一寸ちよつとゆく行ゆくにも新著百種の一冊みやげも土産にやれば女は、夏の
ゆうひ夕陽ゆうやうの憎はげや烈はげしくて御暑ごあつう御座ござりましたると、岐阜ぎふ団扇うちわに風を送
てぬぐいり氷水こおりに手て拭ぬぐを絞しぼり呉くれるまでになつてはあり難うれさ嬉うれしさ御馳ごち
そううり走そうの瓜うりと共に甘うまい事胃いの腑ふに染渡しみわたり、さあ堪たまらぬ影法師殿おんこえむく
 くうぐいすびおんじようと魂たま入り、働はたらき出し玉たまう御容貌ごきりようは百三十二相そうそろも揃そろい御声おんこえ
うぐいすびおんじようは鶯うぐいすびおんじように美音錠みおんじよう飲のましたよりまだ清ごしんく、御心ごしんもじ広ひろ大無暗むやみに拙せつし

者を可愛がつて下さる結構づく尽ゆえめ故堪忍ならずと、車を横に押し
 親父おやじを勘当しても女房に持つ覚悟き極めて目出度めでたく婚礼して見ると自
 分のもうぞう妄像ほど真物ほんものは面白からず、領脚えりあしが坊主ぼうずで、乳の下に
 焼芋こげの焦た様の痣あざあらわれ、然も紙屑屋かみくずやとさもしき議論致され
 ては意気な声も聞きたなくなり、印しるしつき付の花はな合せ負まけても平気なる
 には寛容おおようなる御心却おこころかえつて迷惑、どうして此このよう様な雌めすを配つれあい偶いに
 したかと後悔するが天下半分の大切おおぎり、真実まことを云いば一尺の尺度ものさし
 が二尺の影となつて映る通り、自分の心という燈ともから、さほどに
 もなき女の影を天人じやと思ういなして、恋も恨もあるもの、お辰
 めとても其そのごと如ごとく、おまえの心から製こしらえた影法師におまえが惚ほれ
 て居る計ばかり、お辰の像つげに後光まで付た所では、天晴あつぱれ女菩薩によぼさつと

も信仰して居らるゝか知らねど、影法師じゃく、お辰めはそんな気高く優美な女ならずと、此この爺じいも今日悟つて憎くなつた迷うなく、爰ここにある新聞を讀よめ、と初はじめは手丁寧後は粗放そほうの詞ことばづかい、散々にこなされて。おのれ爺じいめ、えせ物もの知しりの恋の講釈、いとし女房をお辰めお辰めと呼よび捨てすて捨片腹痛しと睨にらみながら、其事そのことの返辞ひきもぐはせず、昨日頼たのみ置おきし胡粉ごふん出来て居るかかと刷毛はけ諸もろ共ともに引ひきようように受取り、新聞懐中して止むるをきかず突つと立たて畳たたざわりあらく、馴なし破あば屋らに駈かけ戻もどりぬるが、優然として長閑のどかに立たる風ふう流ゆう仏ぶつ見るより怒いかりも収いかりり、何はさておき色合程よく仮ぬりに塗ぬ上あげて、柱にもたれ安坐あんざして暫しばく眺ながめたるこそ愚おろなれ。吉兵衛の詞氣ことばになりて開く新聞、岩沼令嬢なりひらこうしやくと業平なりひらこうしやく侯爵こうしやくと題せる所をふと読

下せば、深山みやまの美玉びぎよく都門ともんに入いてより三千ふの砒びに顔色なからしめたる評判さくさく嘖々ちようたりし当代そのいっぴんの佳人いっしよう岩沼いわぬま令嬢れいじようには幾多ほつの公子こうし豪商ごうしやう熱血ねつけつを頭脳ちゆうのうに潮しほして其一そのいっぴん顰ひら一笑いっせうを得えんと欲ほつせしが預かねて今業いまなり平ひらと世評よせひやうある某侯爵むつこうは終つひに子爵ししやくの許諾ゆるしを經ゆて近々ちかぢか結婚けつこんせらるゝよし侯爵こうしやくは英敏えいみん閑雅かんあ今業いまなり平ひらの称空むなしからざる好男子こうなんしなるは人の知しるところところ所ところなれば令嬢れいじようの艶えん福ふく多たい哉かな侯爵こうしやくの艶福えんふくも亦また多たい哉かな艶福えんふく万歳ばんざい羨望せんぼうの到いたりたえに勝かず、と見るみく面色あなせき赤あかくなり青あおくなり新聞紙しんぶんし引ひ裂き捨すて何処いづくともなく打付うちつけたり。

下
恋れん恋れん恋れん、恋こいは金剛こんごう不壞ふゑなるが聖せい

虚言うそという者誰吐たれきそめて正直は馬鹿ばかの如ごとく、眞實は間拔まぬけのように
 扱うわるゝ事あさましき世ぞかし。男女なんによの間変まらじと一言交ひとことかわせ
 ば一生いのちげ變なるまじきは素もとよりなるを、小賢こさかしき祈誓きしよう三昧さんまい、誠少うちなげ
 命いのち毛げに情なさけは薄うき墨含ぼくませて、文句ぶんくを飾り色めかす腹の中うちなげ慨げか
 わしと昔むかしの人の云いたるが、夫それも牛王ごおうを血けがに汚けがし神を証人しんをしんじんとせしは
 まだゆかしき所ところありしに、近いま来こは熊野くまのを茶ちやにして罰ばちを恐おそれず、金
 銀ぎんを命いのちと大切だいじにして、一ひと金千両せんりやう也なり右みぎ借かり用よう仕つか候こう段だん実じつ
よう正ただなりと本式ほんしきの証文しやうもん遣やり置おき、変心へんしんの曉あけは是これが口くちを利きて必かなず取と
りたて立たらるべしと汚こき小判こばんを枷かせに約束やくそくを堅かためけると、或ある書しよに見みえ
いしが、是これも烏賊いかの墨すみで文字もんじ書かき、亀かめの尿いばりを印肉しんじくに仕懸しかくるなど巧たくみ
い出すだより廃すたれて、当あた時は手早てはやく女めは男おとこの公債証書こうちやうしやうを吾名わがなにして取と

り置おき、男は女の親を人質ひとじちにして僕使めしつかうよし。亭主ていしゅもつ持なら理
 学士、文学士つぶし漬が利く、女房持もたば音楽師、画工えかき、産婆三割徳ぞ、
 ならば美人局つつもたせ、げうち、板の間持かせぎ等の業出来わざて然しかも英仏の語
 に長じ、交際上手でエンゲージに詫付かこつけ華族の若様のゴールの指
 輪一日に五いっつむつくらい六位取とる程の者望むような世界なれば、汝珠なんじゆう
 運能よくよく々用心して人に欺あざむかれぬ様ようすべしと師匠教訓されしを、
 何の悪口あざわらいなど冷笑あざわらいしが、なる程、我正直われに過すぎて愚おろかなりし、お
 たつたつ辰によぼさつを女菩薩によぼさつと思あやまいしは第一あやまの過おれきずり、折おれきず疵おれきずを隠おれきずして刀には樋ひを
 彫もつるものあり、根性が腐うそつて虚言美しく、田原が持もつて来た手紙に
 も、御おんなつかしき少時しばしも忘れず何れいず近うちととさまき中父あけ様に申あけし上あけやがて
 朝ちようせき夕おまえさま御前おそば様御傍おに居おらるゝよう神かけて祈おり居おりなどと我

を嬉うれしがらせし事憎し憎しと、怨うらみの眼尻まなじり鋭く、柱にもたれて身は
 力なく下さげたる頭かしら少し上あげながら睨にらむに、浮世のいざこざ知らぬ顔の
 彫像かんかん寛々として大空に月の澄すめる如く佇ごむ気高さ、見るから我胸
 の疑惑はずか耻はしく、ホツと息吐つき、ア、誤あやまてり、是程の麗わしきお辰、
 何とてさもしき心もつべき、去さりし日亀屋の奥坐敷ざしきに一生の大事と
 我も彼も浮うきたる言葉なく、互たがいに飾からず疑ぎわず固かめし約束、仮令たと天
 飛ぶ雷が今落おちればとて二人が中は引裂ひきされじと契ちりし者を、よしや
 子爵の威権あだ烈むこしく他し聳むこがね定むるとも、我の命は彼にまかせお
 辰が命は珠運もら貫くわんいたれば、何どの命ど何どの身体からだあつて侯爵に添そうべき
 や、然しかも其時、身を我に投なげ懸かけて、艶つややかなる前髪おしげ惜お気しげもなく我
 がひざ膝ひざに押おしつけ付つけ、動どう気き可か愛わいらしく泣なき俯ふしながら、拙つたき妾なめを思しい

込まれて其程それほどまでになさけ厚き仰せ、冥加みょうがにあまりてありが
 たしとも嬉しとも此喜このび申すべき詞知ことばらぬ愚おろかの口惜し、忘れもせ
 ざる何日いつぞやの朝、見所くしもなき櫛くしに数々の花彫ほりつけ付て賜たまわりし折
 より、柔やさしき御心ゆかしく思おもひ初そめ、御小刀おこがたなの跡匂におう梅桜はなび、花
 弁らひとひら一片かかも欠せじと大事にして、昼は御恩賜頭おんめぐみかしらに挿さしかざせ
 ば我わがため為の玉の冠、かりそめの立居たちいにも意きを注つけて落おちるを厭いとい、夜
 は針箱おさの底深く蔵まくらめて枕おき近く置ながら幾いくたび度か又開あけて見ようやねむて漸ようやねむく睡
 る事、何の為わたくしとは妾わたくしも知らず、殊更おじ其日おじ叔父ひじょうの非道もつたい、勿もつたい体ななき
 悪口ばか計り、是も妾わたくしめ故思わたくしわぬ不快いを耳いちいちに入れ玉むなさきうと一い胸むな先
 に痛つむしく、さし詰つむしる癩しやあき押おさえて御顔うちまもり打うちまもり守ししに、暢のびやかなる御気象おんきさう、
 咎とがめ立だてもし玉たまわざるのみか何の苦くるしみもなくさらりと埒らちあき、重おも々の

御恩にの荷にのうて余るかえつ甲斐かいなき身、せめて肩揉もめ脚擦さすれとでも僕使つかい玉たまわ
 ばまだしも、却かえつて口くちき、玉たまうにも物柔なかく、御手水おちようずの温湯ぬるゆえん椽が
 側わに持もつて参り、楊枝ようじの房少しょうしむしりて塩ひとこざら一小皿ひとこざらと共に塗ぬり盆ぼん
のに載いせ出いだす僅わずかばかり計けいの事ことをさえ、我夙はや起おきの癖故せきたに汝そなたまでを夙はや
き起おこして尚寒なおき朝風あそにつれなく袖そでをなぶらする痛いたわしさと人ひとを
か護まもう御言葉ごごんご、真しんぞ人間にんげん五十年ごじゅうねん君きみに任まかせて露惜おしからず、真実まことあり丈たけ
ち智慧えいありたけ尽つくして御恩ごごんごを報はなげんとするに付つけて慕ほわしさも一ひと入し
りまさり、心こころという者もの一つ新あらたに添そうたる様ように、今迄いままでは関かまわざりし形な
り容ゆるみ、いつか繕つくろう氣きになつて、髪かみの結ゆい様ようどうしたら誉ほめらりよう
 かと鏡かがみに對むかつて小聲こゝろに問とい、或夜あるばんの湯上ゆあがり、耻はずしながらソツと薄う
す化粧けいざうして怖こわ怖ご坐敷わざしきに出いでしが、笑片わらかた類たぐひに見みられし御眼めもと元何もとやら

存あるように覚えて、人知らずカツと上ひとえ気せしも、単みだしなに身みだ嗜な計かり
 にはあらず、勿もつ体たいなけれど内ない内ないは可愛かわゆがられても見たき願いい、
 悟ふつてか吉兵衛様の貴下あなたとの問答、婚ふ礼とせよせぬとの争ふい、不ふ図と
たちぎぎ立た聞まして魂魄たましいゆらくと足定さだまらず、其その儘まま其処そこを逃にげ出いだし人だな
しばべやき柴部屋しに夢むの如ごとく入いると等いしく、せぐりくる涙なみ、あなた程ほどの方かたの
 女房わがみとは我身わがみの為ためを思おもわれてながら吉兵衛様の無礼過なめすぎた言葉恨にくめ
 しく、水仕女みずしめなりともして一生御傍おそばに居ゐられさいすれば願望のぞみは足たり
 る者を余計な世話、我わがからでも言いわせたるよように聞取ききとられて疎うしろま
 れなば取り返しあかつきのならぬ暁あかつき、辰あかつきは何なにになつて何なにに終おしまるべきと悲かなみ、
 珠運たまご様も珠運たまご様、余あなりにたすぎなき御言葉、小兒こどもの掟とつた小雀こすずめを放はな
 して遣やつた位くらいに辰あかつきを思おもわるとか知らねどと泣なきしが、貴下あなたはそれ

よりだんまり黙言でおたち亀屋を御立なされしに、十日もか苅り溜しため草を一日に
やい焼たような心地して、なげき尼にでもなるより外なき身の行末を歎しに、
まごめ馬籠に御病氣と聞く途端、アツと驚く傍かたわおろかに愚な心からは看病する
うれしを嬉く、御介もうし抱申たる甲斐かいありて今日の御床とこあげ上、芽出度めでたいは芽出
たけ度れど又もや此このまま儘御立かと先刻さつきも台所で思い屈して居たるに、
 吉兵衛様御内儀が、珠運様との縁つ続ぎ度たくば其人様の髪一筋知れぬ
 ようにぬい抜て、おまえの髪しつかと確り結びあわきゆうきゆまりつりよう合せ※※如律令となと唱えて
 谷川すてに流し捨るがよいとの事、憎や老としより嫗の癖に我なぶを黽なぶらるゝと
 はしり知ながら、貴君あなたの御足おんあしを止度とめたさ故に良よいことおし事教られしおぼえよう覚て
ばかげ馬鹿気たる呪まじないも、試やつて見ようかとも惑う程くろし小さき胸のすて苦く、捨ら
 るゝは此身の不ふつつか束故か、此心の浅き故かと独りくや悔しゆう悩んで

居おりましたに、あり難き今の仰せ、神様も御照覧あれ、辰めが一
 生はあなたにと熱き涙わがきもの吾衣物とおを透せしは、そもや、嘘うそなるべきか、
 新聞こそ当あてにならぬ者なれ、其それを真まことにして信まことある女房を疑いしは、
 我ながらあさましとは思ふものゝ形なき事を記すべしとも思えず、
 見れば業平侯爵とやら、位たつと貴く、姿うるわしく、才いみじきよし、
 エ、妬ねたましや、我位われなく、姿美しからず、才もまた鈍ければ、較くらべ
 られては敵手あいてにあらず。扱さてこそ子爵が詞ことば通とおり、思想も発達せ
なまぬ生若なまい者の感情、都風の軽薄に流れて変りしに相違なきかと頻しきり
 に迷い沈みけるが思いかねてや一声はげ烈しく、今ぞ知しつたり移ろい易やす
 き女心、我を侯爵に見替みかえて、汝おのれ一人の栄華を誇ほこる、情なさけなき仰せ、
 此この辰が。

アツと驚き振ふり仰あお向むば、折おり柄から日は傾かきかゝつて夕ゆう栄ばえの空のの
 み外まに明あるく屋やの内しず静かに、淋しみし氣きに立たつ彫ぼ像か計り。さりとては忌い
まま
 々まし、一心しん乱らんれてあれかこれかの二ふた一みち途ちに別わかれ、お辰あが声こゑを耳みみ
きき
 に聞きしか、吉きち兵へい衛ゑの意い見けんひし〜と中あたりて残ま念ねんや、妄もう想ぞうの影えい法ぽう師し
あり
 に馬ま鹿かにされ、有ありもせぬ声こゑまで聞きし愚おろかさ、箇か程ほどまでに迷まわせたる
おのれ
 お辰あめ、汝なんぢも浮う世きの潮うしほに漂うう浮う萍きくさのようさだめな定さなき女をと知しらで天あま
ぼぼつ
 上かみの菩ぼ薩さつと誤あやり、勿も体たいなき光くわう輪りんまで付つたる事こと口くち惜しし、何い処ずこの業な
りひら
 平へいなり癩らい病びょうなり、勝かち手に縁えん組ぐみ、勝かち手に榮たのめ。あまりの御ご言ごん葉えつ、
たしかその
 定さだめなきとはあなただの御ご心しん。あら不思議ふしぎ、慥たしかに其その声こゑ、是こゝもまだ醒さめ
むみよう
 ぬ無む明めいの夢ゆめかと眼めを擦こすつて見みれば、しよんぼりとせし像さう、耳みみを
すま
 澄すませば予かねて知しる樅もみの木の蔭かげあたりに子こ供どもの集ありて鞠まりつくか、風かぜの

持来るもてく数え唄うた、

一寸百突ちよと ついて渡わたいた受取うけとったく、一つでは乳首くわ啣くわえて二つでは乳

首離はないて三つでは親の寝間を離れて四つにはより糸こより初そいつつめ五

では糸をとりそめ六つでころ機織はたおりそめて――

と苦勞知らぬ高調子、無心の口々長閑のどかに、拍子取り連つれて、歌は人

の作ながら声は天の籟おと美しく、慾よくは百つよいて帰そうより他なく、

恨うらみはつき損ねた時罪むくいも報むくいも共に忘れて、恋と無常はまだ無き世界

の、楽しさうらやま羨うらやましく、噫あゝ無心こそ尊たつとけれ、昔は我も何しら糸の清き

ばかりの一筋なりしに、果敢はかなくも嬉しいと云う事身に染しみ初そめし

より、やがて辛苦の結とけばれ解とけぬ濡ぬれ苧おの纏もつれの物思ものい、其色そのいろ嫌きらよと、

眼めを瞑ふさげば生憎あいにくにお辰の面影ありくと、涙さしぐみて、分いわ

疏けしたき風情、何どこ処こに憎にくい所ところなし。なる程定めなきとはあなた
 の御心、新聞一枚に堅き約束を反ほご故ごとなして怒り玉うかかかこと啣かこたれ
 て見れば無理ならねど、子爵もとの許ゆきに行てより手紙は僅わずかに田原が一
 度持もつて来きたりし計ばかり、此方こなたから遣やりし度々の消息、初はじめは親子再会はじめの
 祝いわい、中頃ふりのこは振残かこちごとされし啣かこちごと言こと、人きかには聞がたせ難がたきほど耻はずかしい文も
んだん段んだんまでも、筆とれば其人の耳つけに付て話ようする様な心地して我し
おろからず愚おろかにも、独居ひとりいの恨うらみを数かうる夜半よわの鐘はつらからで、臃おぼろげ氣げ
おうせながら逢瀬おうせうれしき通路かよいじを堰せく鶏とりめを夢の名残の本意ほいなきに憎
そろらしゆう存そろじ候かいなど書かいてまだ足あらず、再かえずがき書こまごま濃こまごま々と、色好み
わこうど深わこうどき都わこうどの若わこうど伎わこうどを幾いくたり人か迷まよわせ玉たまうらん御標致ごきりようの美うつくしさ、却
たねつて心配たねの種子たねにて我われをも其等それらの浮うきたる人々と同じ様ように思おぼし出いら

んかと案じ候ては実にく頼み薄く口惜ゆう覚えて、あわれ歳
しつき月の早く立かし、御おもかげの変りたる時にこそ浅墓ならぬ
わが我恋のかわらぬ者なるを躪あらわしたけれと、無理なる願ねがいをも神前に歎
きこき聞え候と、愚痴の数々まで記して丈夫そうな状袋を拵えらみ、封じ
 目油断なく、幾度か打かえしく見て、印紙正しく張り付つけ、漸く
 差し出いだしたるに受取たと計の返辞もよこさず、今日は明日はと待
 つ郵便の空そらだのめ頼なる不実の仕方、それは他あだし婿がね取らせんと
 て父上の皆な為されし事。又しても妄想もうぞうが我を裏切うらぎりして迷わする
 声憎しと、頭かしらあぐを上れば風流仏悟り済すました顔、外には
きよみず清水の三本柳の一羽の雀すずめが鷹たかに取られたチチャポンく一ちよつと寸

百ついで渡いた渡いた

の他音もなし、愈々影法師の仕業に定まつたるか、エ、腹立
 し、我最早もはやすつきりと思い断ちて煩惱ぼんのう愛あい執しゅう一切棄すつべしと、
 胸には決けつじよう定じようしながら、尚なほ一分の未練残りて可愛かわゆければこそ睨にら
 みつむる彫像、此時このとき雲取り、日は没いりて東窓の部屋の中うちや、暗
 く、都すべての物薄墨色になつて、暮残りたるお辰白うきいず肌浮うきいず出る如
 く、活いきいき々とした姿、朧月夜おぼろに真まことの人を見る様ように、呼よばゞ答こたもな
 すべきありさま、我わが作りたる者なれど飽あくまで溺おぼれ切きつたる珠運たまごゾツ
 と総身の毛も立たちて呼吸いきをも忘れ居たりしが、猛然として思い翻かえせ
 ば、凝こつたる瞳ひとみキラリと動はず機会はずみに面色たちま忽たちまち変かり、エイ這しやつつら顔らの
 美しさに迷う物かは、針ほども心に面白おもしろき所あらば命くさえ呉くれてや
 る珠運も、何の操なきおのれに未練残すべき、其生そのなま白しらけたる素そ

つくびみる けがら
 首見も穢わしと身動きあらく 後 向になれば、よゝと泣声し
 て、それまでに疑われ疎まれたる身の生甲斐なし、とてももの事方
 たさま
 様の手に惜からぬ命捨てしと云は、正しく木像なり、あゝら怪
 しや、扱は一念の恋を凝して、作り出せしお辰の像に、我魂の入
 たるか、よしや我身の 妄 執の憑り移りたる者にもせよ、今は
 恩愛切て捨、迷わぬ初に立歸る珠運に妨なす妖怪、いでいで
 仏師が腕の冴、恋も未練も段々に切捨くれんと突立て、右
 の手高く振 上し鉦には鉄をも碎くべきが気高く仁しき情溢るる
 ばかりた
 計に湛ゆる姿、さても水々として柔かそうな裸身、斬らば熱血
 ほとばし
 も逆りなんを、どうまあ邪見に鬼々しく刃の酷くあてらるべき、
 うらみにくみ
 恨も憎も火上の氷、思わず珠運は鉦取落して、恋の叶わず思の

切れぬを流石男さすがの男泣き、一声吞のんで身をもがき、其儘そのままドウと臥ふ
 す途端、ガタリと何かの倒るゝ音して天より出いでしか地より湧わきしか、
 玉の腕かいなは温く我頸筋くびすじにからまりて、雲の鬢びんの毛匂におやかに頬ほほを摩なで
 るをハツト驚き、急せわしく見れば、有ありし昔に其儘そのままの。お辰かと珠
 運だきも抱しめて額ひたいに唇。彫像が動いたのやら、女が来たのやら、問とわ
 ば拙つたなく語らば遅し。玄げんの又また玄摩訶まんま不思議ふしぎ。

団円 諸法実相

帰依きえぶつの御利益ごりやく眼前がんぜんにあり

恋こひに必ず、必ず、感かんのう応おうありて、一念いっねんの誠まこと御心ごこころに協あはい、珠しゅう運うん
 は自おのが帰依きえぶつの来らい迎ごうに辱かたじけなくも拯すくいとられて、お辰たつと共に手てを
 携たづなえ肩かたを駢ならべ優々ゆうゆうと雲うみの上うへに行ゆきし後あとには、白ホワイ薔トローズ薇におく香かぐ薰んじて吉きち兵べい
 衛べえを初はめ一村いちそんの老幼らうごう芽出度めでたしとさゞめく声こゑは天鼓てんこを撃うつ如ごとく、七しちぞ

蔵うがゆがみたる耳を貫けば是これも我慢の角つのを落おとして黒山こくざんの鬼窟きくつ

を出い、発ほつ心勇しんましく田原と共に左右の御前立おんまえだちとなりぬ。

そののちごころるわ

其後光輪美しく白雲のつに駕のつて所々しよしよに見ゆる者あり。或紳士あるの

拜ビロウドまれたるは天鷲絨すその洋服裳長すそく着玉だちよういて駄鳥あざやかの羽宝冠あざやかに鮮な

りしに、某貴族なにがしの見られしは白襟えりを召めして錦おんおびの御带こんじき金色かくえく赫奕とがま

たりしとかや。夫それに引変え破襜やぶれおんぼう袍わらぞうり着て藁草履わらぞうりはき腰とがまに利鎌とがまさ

したるを農夫は拜あわちぢみみ、阿波縮ゆかたの浴衣ゆかた、綿八反めんはつたんの帯めんはつたん、洋銀かんざしの簪かんざし

位ぐらいの御姿こあきんどを見しは小商人こあきんどにて、風寒にしんろうこき北海道にしんろうこにては、鱧にしんろうこの鱗怪にしんろうこ

しく光るどんざ布子ぬのこ、浪なみさやぐ佐渡さどには、色も定かならぬさき織なみ

を着て漁師共めの眼めにあらわれ玉なりひらこうしやくいけるが業ほど平侯爵ほども程かかと経かかとて踵かかと

小さき靴なみをはき、派手なりひらこうしやくなりボンの飾りまばゆき服を召ほどされたるに

値偶ちくうせられけるよし。是これ皆いっさい一切いきよう経きやうにもなき一体の風流ふうりゆう仏ぶつ、珠
 運しゆんが刻くみたとると同じ者の千差万別の化身けしんにして少しも相違あひだなけれ
 ば、拜たがみし者たれ誰たれも彼かも一代の守まもり本尊ほんぞんとなし、信仰あつ篤あつき時は子
 孫はんじよう繁はん昌じやう家内和睦わぼく、御利益ごりやく疑ぎなくたとい仮令たとい少々御本尊ごほんぞん様を恨うらめしき
よう様に思おもう事ことありとも珠運しゆんの如ごとくそれを火上かみの氷こおりとなす者ものには素もとよ
 り持もち前まえの仏ぶつ性じやうを出いだして玉たまいて愛護あいごの御誓願ごせいがん空くわしからず、若もし
まあやま又過またつてマホメツト宗しゆうモルモン宗しゆうなぞの木もく偶ぐ土像どざうなどに近ちかづく
げんとうにせ時は現当二世げんとうにせの御罰おんばちあらたかにして光輪ごこうを火輪かりんとなし一家いっけをも
こんぼく魂こん魂ぼくをも焼やき滅ほろし玉たまうとかや。あなかしこ穴賢あなしこ。

青空文庫情報

底本：「日本の文学 3 五重塔・運命」ほるぷ出版

1985（昭和60）年2月1日初版第1刷発行

底本の親本：「風流仏」吉岡書籍店

1889（明治22）年9月発行

入力：kompass

校正：今井忠夫

2003年12月8日作成

2014年7月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風流仏

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>